

# 東京大学構内遺跡調査研究年報 1

1996年度

東京大学埋蔵文化財調査室

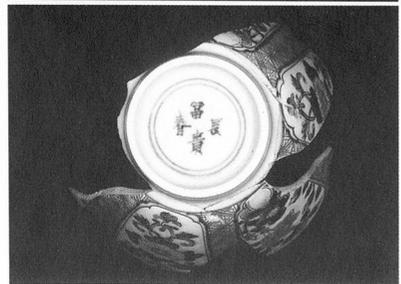
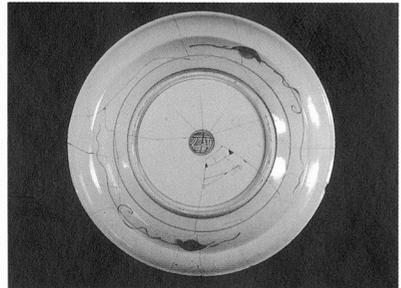




SK06出土肥前産染付大皿



SK09出土肥前産色絵小杯



東京大学本郷構内の遺跡 農学部家畜病院地点出土遺物



# 東京大学構内遺跡調査研究年報 1

1996 年度

## 目 次

### 第 I 部 東京大学構内遺跡発掘調査略報

東京大学構内遺跡の発掘調査の経緯 .....	1
1 医学部附属病院外来診療棟地点発掘調査略報 .....	3
2 理学部附属植物園内の遺跡（原町遺跡） 研究温室地点発掘調査略報 .....	7
3 薬学部新館新営に伴う埋蔵文化財発掘調査略報 .....	11
4 工学部 14 号館地点発掘調査略報 .....	13
5 農学部図書館新営に伴う埋蔵文化財発掘調査略報 .....	18
6 医学部附属病院看護婦宿舍地点発掘調査略報 .....	20
7 教育学部情報教育棟新営に伴う埋蔵文化財発掘調査略報 .....	26
8 農学部校舎（7 号館）新営に伴う埋蔵文化財発掘調査略報 .....	27
9 農学部総合研究棟新営に伴う埋蔵文化財発掘調査略報 .....	29
10 工学部校舎（1 号館）新営に伴う埋蔵文化財発掘調査略報 .....	31
11 医学部附属病院 MRI-CT 地点発掘調査略報 .....	33
12 総合研究資料館増築に伴う埋蔵文化財発掘調査略報 .....	36
13 玄番所遺跡発掘調査略報 .....	39
14 本郷福利施設新営に伴う埋蔵文化財発掘調査略報 .....	43
15 医学部附属看護婦宿舍ゴミ置き場地点埋蔵文化財発掘調査略報 .....	45
16 薬学部資料館新営に伴う埋蔵文化財発掘調査略報 .....	46

### 写真図版

### 第 II 部 東京大学構内の遺跡発掘調査報告

東京大学本郷構内の遺跡 農学部家畜病院地点 発掘調査報告 .....	97
新井城跡—理学部附属臨海実験所新研究棟地点発掘調査概要報告— .....	185

### 第III部 東京大学埋蔵文化財調査室要項

東京大学構内遺跡調査一覧	223
遺跡地図	226
研究・教育・普及活動	
論文・研究会発表要旨	229
調査室刊行物	235
学内広報	235
その他の広報誌	235
講演会・研究発表	236
新聞掲載	239
書籍掲載	240
貸出	240
東京大学埋蔵文化財運営委員会規則	
埋蔵文化財調査室規則	
埋蔵文化財調査室組織	

### 第IV部 東京大学埋蔵文化財調査室研究紀要 1

「瓦積みの穴蔵」について	大成可乃	245
東京大学本郷構内の遺跡		
薬学部新館地点 SE 67 出土遺物の年代的考察	佐藤律子・遠藤香・堀内秀樹	263
東京大学本郷構内の遺跡における年代的考察	堀内秀樹	279
附図 東京大学本郷構内の遺跡 陶磁器・土器編年表（1～10）		
江戸遺跡出土資料による磁器碗・皿の変遷	成瀬晃司	307
一文様、銘款を中心に		

# 第 I 部 東京大学構内遺跡発掘調査略報



## 東京大学構内の発掘調査の経緯

東京大学本郷キャンパスで、埋蔵文化財の発掘調査が本格的な問題になってきたのは、1983年に、創立百年記念事業の一環として計画された「山上会館」と「御殿下記念館」の建設を発端とする。これ以前も構内の開発にともなう発掘調査が行われることがあったが規模も小さく、また「遺跡」の対象が「縄文時代」～「古墳時代」にほぼ限られていた。

ところが、近年の全国的な趨勢として、発掘調査の対象を中世～近世に拡大する流れが強まり、特に東京では江戸時代の中心地としての重要性から、東京都や特別区などで開発に伴う江戸遺跡の発掘調査が積極的に行われるようになってきていた。

本郷キャンパスが加賀藩江戸屋敷であることは周知の事実であったし、また「御殿下記念館」建設予定地近辺では「弥生時代」の土器が過去に発見されているとの記録もあったため、建設に先だって試掘調査が行われた。この結果、加賀藩邸の一部と考えられる礎石や、陶磁器・瓦などが数多く見つかったため、東京都および文京区教育委員会は、大学に建設地全域の発掘調査を行うことを勧告した。

また、これと相前後して、「法学部4号館」、「文学部3号館」、「医学部附属病院中央診療棟」、「理学部7号館」の建築計画も決まり、これらの開発面積は15,000m<sup>2</sup>以上に達することになった。学内で協議を行った結果、1983年11月に総長を委員長とする「臨時遺跡調査委員会」を設け、その下に「遺跡調査室」を組織してこの状況に対応することとなった。

この際の大学としての認識は、「臨時」のついた委員会で明らかなように、この山を越えれば速やかに解散するものとしており、調査会に配属された教職員はいずれも年限付きのもので、また、百年記念事業に伴うものは庶務部広報企画課、病院地区は施設部、理学部7号館は理学部事務室が統括を行っており、各地点ごとに半ば独立した感のあるものであった。

1987年6月には上記の地点の発掘調査はすべて終了し、しばらくはそれぞれの現場内に設けられた仮設建物で整理作業を行っていたが、翌88年4月以降順次、駒場第2キャンパス内の2棟の建物に移動し、整理作業を行うこととなった（理学部、法・文学部は仮設建物内で整理を続行、報告書刊行とともに解散）。

また、発掘調査の終了に伴って、遺跡調査室は「埋蔵文化財調査室」と名称を変更し、人員を大幅に縮小して、学内組織として発足することとなる。1990年中には上記発掘地点

の「発掘調査報告書」の刊行を終えたが、この頃から本郷構内の再開発が再び活発に行われるようになってくる。また、本郷キャンパスに限らず東京大学全体の、再開発に伴う発掘調査や試掘が、関東地方一円に拡大してゆくことになる。

90年の医学部附属病院外来診療棟を皮切りに、特に92年以降は、再開発のテンポが早まり、全員が駒場第2キャンパスから出払っていることが多くなった。また発掘調査は、一現場に2名以上の担当者が常駐するのが望ましいが、一人で現場を担当するという事態も多発した。この実情をふまえて、助手2名の増員が認められ現在に至っている。

発掘面積の飛躍的な増加に伴って、保管する遺物の量も加速度的に膨らんでくる。

2棟の建物に入りきれないものの一部については、建物脇のガレージにシートをかけて保管するなどの応急処置をとったが、遺物の増加には追いつかず、同キャンパス内に収蔵庫を1棟確保し、更に別の建物の一部を収蔵スペースとして使うといった処置をとってきたが、駒場第2キャンパスの再開発計画によって、収蔵スペースの移転を余儀なくされ、茨城県新治郡八郷町柿岡所在の理学部管理地内にプレハブの収蔵庫を建設し、整理作業の済んだものの一部を保管することとなった。

さまざまな問題を抱えつつも、本郷構内を中心とする東京大学キャンパスの発掘調査は着実に成果を上げているといえよう。近世遺跡の発掘調査は、「江戸」を中心とするものの、現在ではほぼ全国に波及し、東京以外の地方公共団体においても積極的に発掘調査の対象にするようになってきている。その中でも本郷キャンパスは、遺構の残りが比較的良形で発掘面積も広いために全国的に注目されているフィールドの一つといえよう。出土する遺物も加賀藩の財力を反映して、陶磁器を中心に良質のものが数多く見つかっている。4冊の報告書刊行以後、発掘件数が極めて多かったとはいえ、成果報告の刊行が大幅に遅れているが、この年報を皮切りに定期的な刊行をめざし努力してゆきたい。

本書では、調査室のこれまでの活動の記録として、発掘調査地一覧を示すとともに、可能な限り未報告の発掘調査の概略報告を収録した。また、発掘規模の小さなものについては年報で本報告をおこなう事とした。

さらに、室員の研究活動の成果を、紀要として後半に掲載している。

本報告が未刊行のものを数多く残しているが、今後単行本として順次刊行してゆく予定である。

(寺島 孝一)

# 1 医学部附属病院外来診療棟地点発掘調査略報

## 調査の目的と経過

今回の調査は医学部附属病院外来棟新営に伴う事前調査である。試掘調査は現行建物解体と並行して行い、重機によるコンクリート基礎の除去作業中に江戸期の遺構、遺物が検出された。その結果、本地点においても遺跡の存在が確認されたため、本調査を実施することになった。

## 遺跡の位置と歴史的環境

医学部附属病院外来診療棟地点は龍岡門より北に伸びるバス通りの東側に面し、東には中央診療棟地点が隣接する位置にある（第Ⅲ部-図1）。江戸時代には文献、絵図などの解釈から加賀藩が本地点を含む本郷邸を下賜された元和二、三（1616、7）年から、大聖寺藩成立の寛永十六（1639）年までは加賀藩下屋敷地内に、寛永十六年から八百屋お七の火事が発生した天和二（1682）年までは大聖寺藩上屋敷地内に含まれている。火事が1つの契機となった加賀藩邸の下屋敷から上屋敷への移行、大聖寺藩邸の大幅な屋敷範囲変更により、それ以降は両藩邸の地境域に該当することとなる。そして文政十一（1828）年に大聖寺藩が藩邸の西に隣接する加賀藩邸部分約942坪余を借地したことにより、その後は本地点全てが再び大聖寺藩邸に含まれることになる。

この間の調査地点に関する火災記録には以下の通り大聖寺藩邸が全焼したとされるものに天和二（1682）年十二月（八百屋お七の火事）、元禄十六（1703）年十一月（水戸様火事）、享保十五（1730）年一月、元文三（1738）年一月があり、類焼したとされるものに文政八（1825）年十二月がある。これらの痕跡はいくつかの遺構の覆土、遺物の状態によって確認されており、本地点の遺構の変遷を復原するにあたってのキーポイントの1つである。

## 遺構と出土遺物

### 1. 先土器時代

調査区東南部の立川ロームIV層中より、ナイフ形石器（一部欠損）が1点検出された。

## 2. 江戸時代

本地点からは溝、石組溝、地下室、土坑、採土坑、井戸、厠の下穴、礎石列などが検出されている（図1，PL.1～3）。時期的には遺構の主軸，伴出遺物，火災記録などによって①期：～天和二（1682）年，②期：～元文三（1738）年，③期：～1820年代，④期：～明治元（1868）年の4時期に大別できる。

以下に各期毎の主要遺構の概要を述べる。

①期の主要遺構には溝がある（SD45など）。SD45（PL.1下）の覆土から「ミなと藤左衛門」銘の焼塩壺や，17世紀中葉に位置付けられる肥前磁器などが出土しており，それを廃絶年代の根拠としている。またSD45など本期に位置付けられる遺構の主軸方位は，N-6°-Wに平行ないし直交を示し，②期以降に位置付けられる遺構の主軸がほぼ真北を示している点で区別される。

②期の主要遺構には地下室，礎石列，側板止めと考えられる杭痕を伴う溝などがある。

礎石列には建物や，塀の基礎と考えられるものが幾つかあるが，塀の基礎の中にはその位置から両藩の地境に該当するものも検出されている。これは調査区東寄りにありほぼ1間間隔で南北に延びている礎石列である（SB155）。ほとんどの掘り方では礎石は再利用のため抜き取られ根石が残存しているにすぎないが，個々の掘り方の規模，形態によって東側に支柱，西側に支柱を配したことが確認でき，大聖寺藩邸側を表とした地境の塀であったことが確認できる。

検出された地下室の多くが覆土に，焼土，2次火熱を受けた陶磁器を多量に含有しており，火災による廃絶，廃棄が窺われる。年代的には肥前磁器の年代観により文献上の元禄十六年の火災に相当するものと，享保十五年または元文三年の火災に相当するものがある。形態的には階段を有し，複数の室部が構築されているものと，方形状の開口部から直接室部につながるものに大別される。前者はSB155の西側の加賀藩邸内より（SU300（PL.2上・中））後者は東側の大聖寺藩邸内より検出されている。また，大聖寺藩邸内にある地下室はSB155の東側にあり，それと平行に南北に2列の列状を呈している特徴を有し，法学部4号館・文学部3号館地点，理学部7号館地点における地下室の立地と類似した様相を示すことから，大聖寺藩邸「詰人空間」内の南北に延びる長屋の庭部分にあたることが考えられる。

③期の主要遺構期にはSK152，290（PL.2下）などの大型土坑がある。加賀藩邸最東部に位置し，平面，断面ともに不定形で，壁面，坑底には工具痕が顕著に認められ，整形さ

れた痕跡はない。また坑底にはテラスを多く有し、いずれも凹凸が顕著である。一見すると複数の遺構が複雑に重複しているように思われるが、覆土の観察から1時期に埋没したものと考えられる。このような状況から土採りを目的とし、順次掘削された穴を芥溜として転用した利用が推測される。こういった採土坑兼芥溜の存在により、本地点の加賀藩邸内での位置付けは「裏の空き地」といった様相が推測される。また、大聖寺藩邸側では遺構群に顕著な変化はなく、引き続き長屋が立ち並んでいた可能性が高い。

④期の主要遺構には石組溝、厠の下穴、土坑、井戸、植木の移植痕などがある。石組溝、厠の下穴は大聖寺藩邸内にあり、ともに南北に並んでいる。石組溝は長屋の境界を示し、そこから発生した生活排水等の処理を目的としたものと考えられる。またこの石組溝の張り出し部分東に隣接する井戸(SE271(PL.3上))は、文化年間とされる大聖寺藩邸絵図に描かれた井戸に比定される。厠の下穴は石組溝の東側に位置し、長屋に帰属していたと考えられるが、複数の下穴の坑底付近より、簀が検出していることから(PL.3下)、本時期における長屋の居住者は女性であった可能性が高い。

遺物は陶磁器を中心にコンテナにして数百箱の量を得た。これらの中には享保十五年もしくは元文三年の火災による一括廃棄資料や、SK81に見られる「天保」年号の紀年銘資料を含む一括廃棄資料など、絶対年代を位置付けることのできる資料が多数出土しており、陶磁器・土器などの編年、流通や、当時の生活様式を考える上での良好な資料である。

## 成果と問題点

今回の調査でも多量の遺構・遺物のデータを得ることができた。それらが藩邸の周縁部に位置する本地点とどのように関わってくるのか、隣接する中央診療棟地点(大聖寺藩)、御殿下記念館地点(加賀藩「御殿空間」)などから得られたデータとの比較研究によって、本地点の特色を捉えることが課題となる。それにより藩邸研究、さらには江戸遺跡研究の一助を成すものになろう。(成瀬 晃司)

## 引用・参考文献

藤本強・寺島孝一・成瀬晃司 1992「22. 東京大学本郷構内の遺跡—医学部附属病院外来棟地点—」

『東京都遺跡調査・研究発表会』17発表要旨

成瀬晃司 1994「江戸藩邸の地下空間—東京大学本郷構内の遺跡を例に—」

『武家屋敷—空間と社会—』山川出版社

4

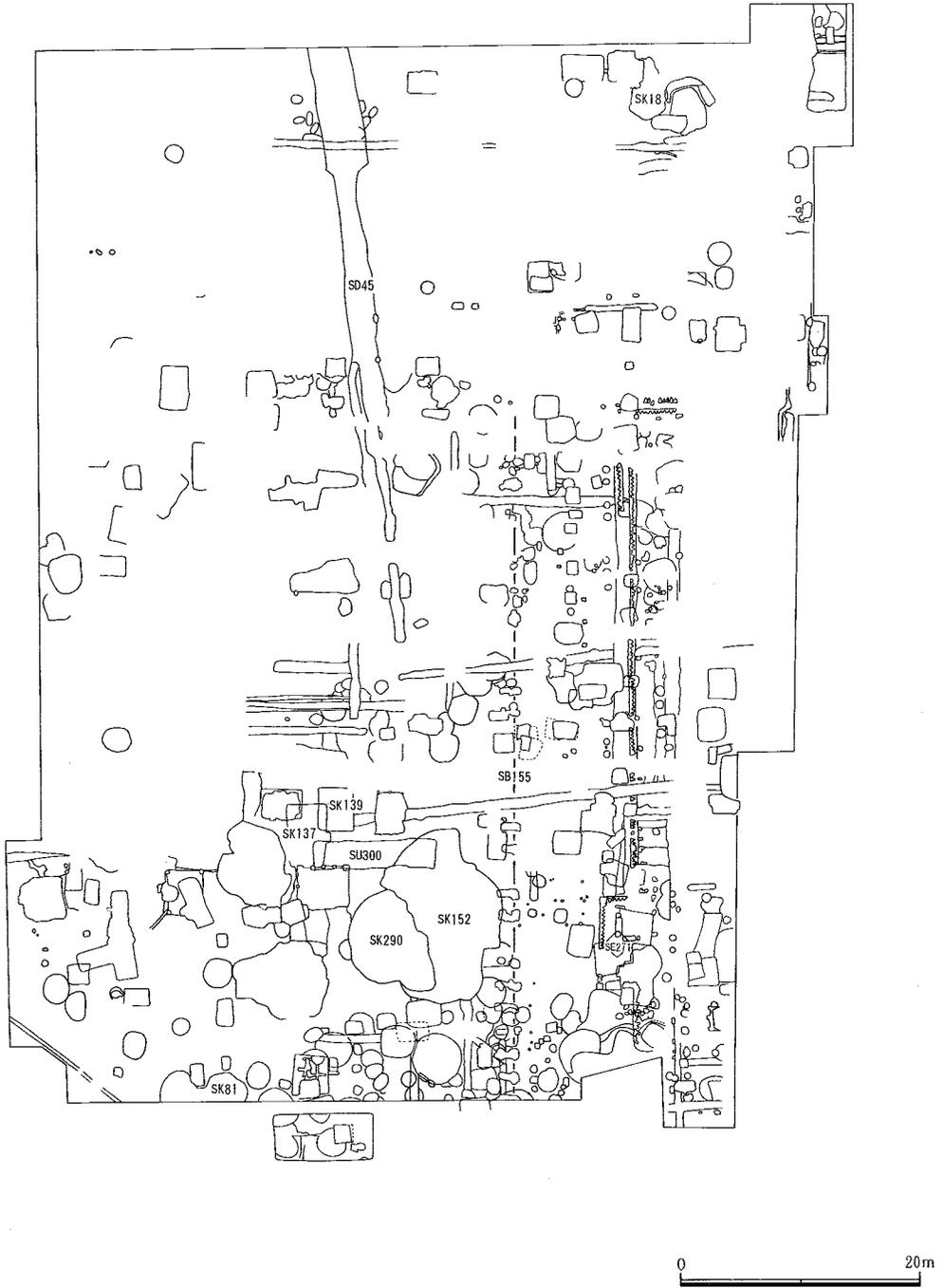


図1 外来診療棟地点全体図

## 2 理学部附属植物園内の遺跡（原町遺跡） 研究温室地点発掘調査略報

### 調査の目的と経過

東京大学理学部は、附属植物園に研究温室の新営を計画した。それを受けて埋蔵文化財調査室では、第1期分の建設予定地（本地点の東南部）を1991年度に試掘調査を行った。その部分は、東南方向に開く谷の斜面上に位置していたことから、近代以降の盛土が厚く、温室建設による遺構面への影響がないとの行政判断から本調査には至らなかった。再び、理学部から第2期分の建設地内の埋蔵文化財の有無について確認の依頼があり、試掘調査を行った。その結果、第2期建設地では、最も浅い箇所では約50cmで遺構確認面に達することが確認され、本調査が必要との判断を受け、調査を実施する運びとなった。

### 遺跡の位置と歴史的環境

東京大学理学部附属植物園（通称、小石川植物園）は、文京区白山3-7-1に位置する。当地は本郷台地が指ヶ谷の崖で侵食されて分かれた白山台地の台地西側上にある（図2）。縄文時代には中期から晩期にかけての小石川植物園内貝塚として知られている。

江戸時代には、承応元（1652）年に3代将軍家光の四男で当時館林藩主だった綱吉の別邸となり、小石川御殿（あるいは白山御殿）とよばれた。綱吉は5代将軍となり江戸城に入城した延宝八（1680）年までこの地で生活を営んでいた。その後も御殿はそのまま残され、明御殿として明御殿番や門番などを置いていつでも使えるようにしてあり、弓の競技などが催されていた。しかし綱吉の死後14年の正徳三（1713）年に小石川御殿は取り払われた。これと平行して貞享元（1684）年に御殿の北隅に小石川薬園が開設された。薬園は敷地の増減を繰り返し、享保六（1721）年に小石川御殿の敷地全てが下賜され、明治維新まで存続した。今回の調査地点は小石川植物園の東部に位置し、小石川御殿取り払い後、享保六年に薬園奉行に任ぜられた岡田利左衛門が管理するまでは旗本地であったと考えられる場所にあたる。

### 遺構と出土遺物

今回の調査で検出された遺構は、全て江戸時代に属するもので、地下室、井戸、土坑、芥溜、溝、柱穴列などがある（図3，PL.4）。基本土層は、近代以降の耕作土がローム面

にまで達しており、遺構確認面は全てローム面である。遺構の主な廃絶年代は、出土遺物より17世紀代と19世紀代の資料に大別でき、御殿期に帰属するものと薬園期に帰属するものを容易に識別することが可能である。18世紀代の遺物が少ないことは薬園といった性格に起因しているものと考えられる。

御殿期に帰属する遺構の主なものに、SK27, 45, 57がある。

SK45, 57はともに不整長方形を呈する土坑である。確認面からの深さは約40cmと浅く、壁、坑底ともに凹凸が顕著である。覆土中からはかわらけ、焼塩壺、貝、魚骨を主体とした遺物が多量に出土しており、ハレの宴後のゴミ処理を目的として掘削された芥溜と考えられる(PL. 5上)。年代的には、長方形二重角枠内に「天下一塚ミなと藤左衛門」銘の焼塩壺、「離し糸切り」や右回転のロクロ成形主体のかわらけ、JB-1-c類(第II部VII-2参照)の肥前磁器碗などが両遺構から共通して出土していることより、1650年代後半から1660年代に位置付けられ、さらに陶磁器の中に火災による被熱を受けたものが含まれていることから寛文八(1668)年の火災が考えられ、その前後に催された綱吉に関する宴会に伴う廃棄の可能性が指摘できる。

SK27は、平面長方形を呈する土坑である。壁はほぼ垂直に立ち上がり、壁、坑底ともに比較的丁寧な整形が施されている。遺物は覆土最下層より陶磁器、焼塩壺、かわらけなどが多量に出土している。本遺構はその形態より、遺構廃絶後に芥溜として2次利用された可能性が高い。また、遺物の出土状態から、遺構廃絶直後に一括廃棄を行い、短期間で埋め戻されたものと考えられる。本遺構出土資料には、「天下一御壺塩師堺湊伊織」銘や、小枠の「泉州麻生」銘の焼塩壺、JB-1-d類の肥前磁器碗が多く含まれ、1680年代の廃棄と位置付けられる。特に「天下一御壺塩師堺湊伊織」銘の焼塩壺のうち、焼成前に「天下一」部分を削り取った製品が2点含まれており、天和二(1682)年七月とされる「天下一」禁止令との関連から注目される。

薬園期に属する遺構の主なものには、SX13, SK25, 33などがある。いずれも19世紀第2四半期代の遺物を出土しており、該期には本地点の北側はゴミ捨て場の用途で利用されていたと考えられる。

年代は限定できないが、本地点の北寄りとは、南寄りにほぼ同規模の溝状遺構が並行して延びている。またそれぞれの南側には、それと並行する堀跡と考えられるピット列が存在し、何らかの区画が施されていたと考えられる。

地下室の中には白山四丁目遺跡で検出された地下坑と類似するものも存在する。SU14が

それで、安全面から縦坑の途中までしか調査できなかったが、その規模や、長辺にあたる壁面に足受けの小穴が対に掘られているという点で一致しており、同様の地下坑になるものと推測される(PL. 5下)。覆土上層からの出土遺物の年代観より、18世紀第4四半期以前に廃絶されている。

### 成果と課題

今回の調査は、約200m<sup>2</sup>と狭い面積を対象としたが、白山御殿に関連すると考えられる17世紀後半代の良好な一括資料を得ることができ、該期における遺物研究の一助を成すものと期待される。また、江戸時代の遺構の覆土中より、コンテナ2箱分の縄文土器が採集され、小石川植物園内貝塚を再認識する資料として位置付けられよう。

(成瀬 晃司)

### 参考文献

文京区役所 1968『文京区史』巻二

白山四丁目遺跡調査会 1981『白山四丁目遺跡』

成瀬晃司・堀内秀樹・両角まり 1994「東京大学理学部附属植物園内の遺跡 研究温室地点-SK27出土の一括資料一」『東京考古』12

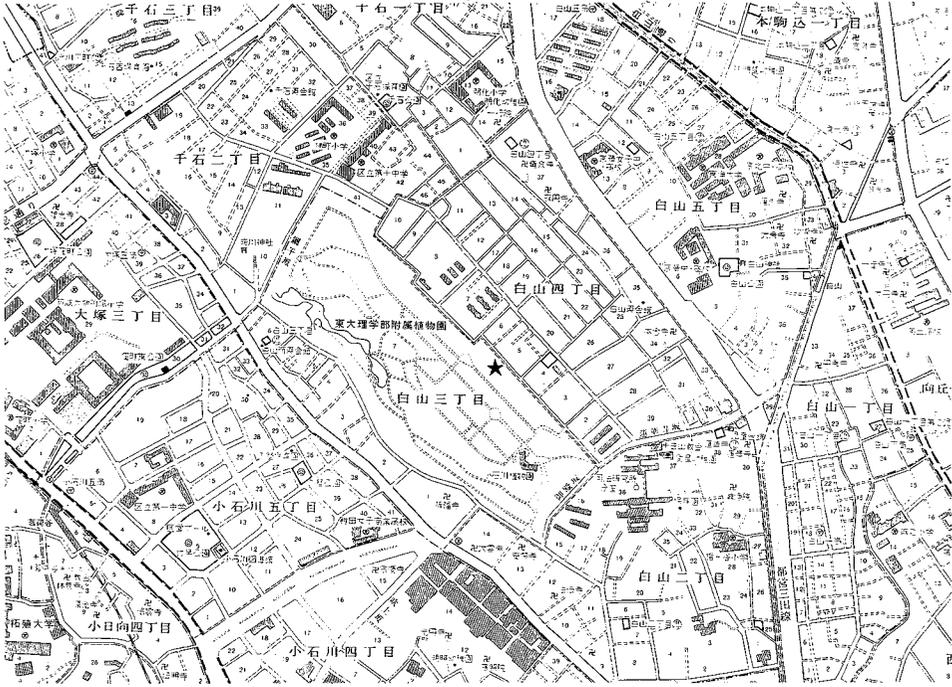


図 2 調査地点の位置 (★調査地点) 1 : 14,000

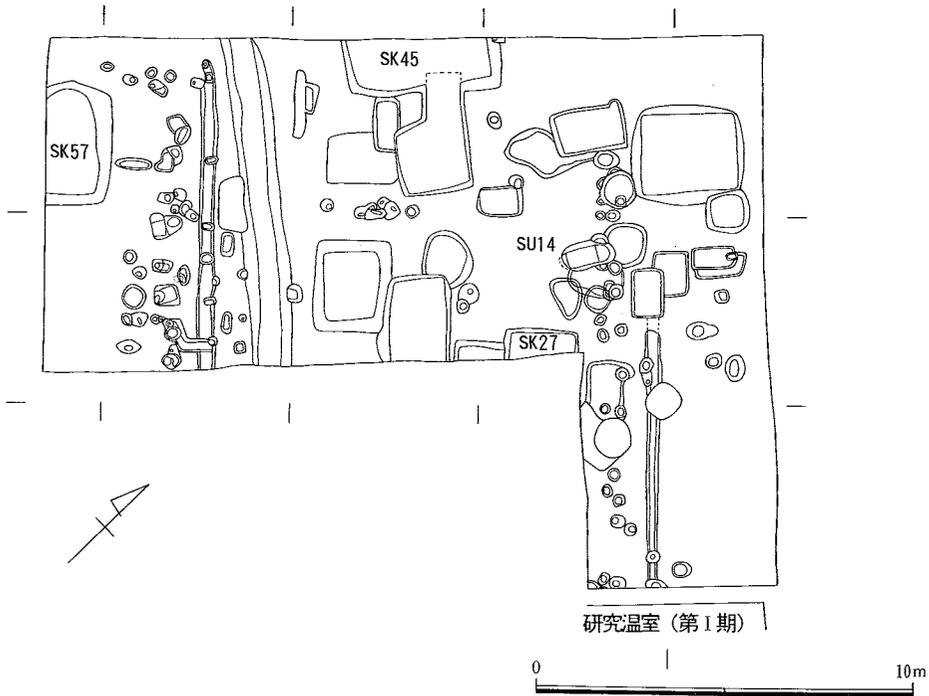


図 3 研究温室地点全体図

### 3 薬学部新館新営に伴う埋蔵文化財発掘調査略報

本調査は既存校舎の南側における薬学部校舎新営計画に伴い、予定敷地内の発掘調査を行ったものである。発掘調査は1992年10月21日から12月18日まで行い、調査面積は1300m<sup>2</sup>である。調査区は概して遺存は悪く、特に中央から北側にかけては近代以降の削平を大きく受けており、地下室や井戸など、一部の深い遺構しか依存していなかった。また南側についてもローム直上から近代以降の盛土が厚く堆積しており、近世の盛土や生活面は確認されなかった。

検出された遺構は井戸、地下室、土坑、ピット、溝状遺構など全部で約100基ほど確認された(図4)。遺構の年代は出土遺物から17世紀前半から中葉のものがほとんどである。

井戸は計12基確認されており、近代のものが1基、18世紀代のもものが1基のほかは全て17世紀前半代の井戸である。これらの井戸は全て素掘りであること、径が70~120cmとそれ以降のものに比べると小型であること、壁面には足掛けと思われるくぼみが相対して掘られていることなど共通の特徴を有している。地下室は調査区南東側に集中して計5基確認されている。全てが17世紀後半代のものである。このうちSU103は上部を近代以降の攪乱に壊されているが、遺存している坑底には長さ100cm、幅40cm程の切石が3枚並べられており、それを囲うように壁に使用された切石が設置されていた。また、南側は恐らく地下室に入る階段であろうと推定されるが、ステップが確認された。これら大型の遺構を除いて遺構の遺存状況は悪く、有機的に屋敷等の配置などを復元できるといった状況ではなかった。

調査区は江戸時代を通じて前田藩屋敷内であり、屋敷の絵図では御殿空間内の奥向御殿の中央部付近に位置する。今回の調査では御殿に関係すると考えられる面や礎石等は確認されず、奥向御殿と称される部分の建物の展開や、基礎工法など考古学的にはまったく窺うことはできなかった。また、絵図面は現存しているもっとも古いものが元禄年間(1688~1704)のもので、それ以前の本郷邸が後世の絵図に示されているような土地の利用をしていたかは不明である。したがって、調査によって検出された遺構群の性格は判断できないが、出土した瓦には金箔が施されたものが多くみられたことから御殿又はその付近であった可能性は高いと考えている。

(堀内 秀樹)

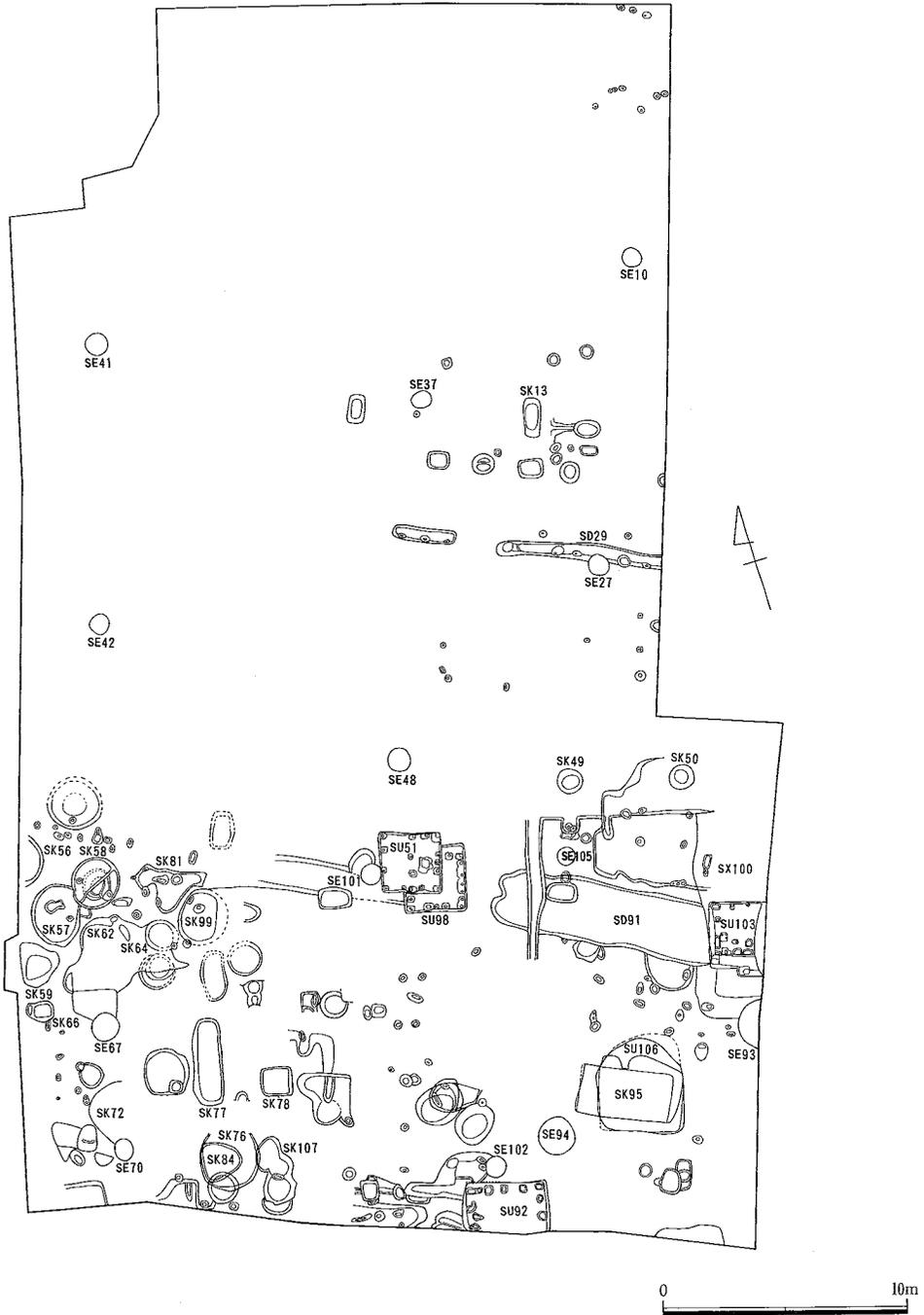


図 4 薬学部新館地点全体図

## 4 工学部14号館地点発掘調査略報

### 調査の目的と経過

本調査は工学部14号館新営に伴う緊急調査で、約1700m<sup>2</sup>を対象に、1992年11月26日から1993年2月23日まで行った。

### 遺跡の位置と歴史的環境

工学部14号館地点は本郷台の東端、不忍池に延びる舌状台北側緩斜面上に位置し、東京大学本郷キャンパスの正門北側、本郷通りに面した場所にある（第III部-図1）。周知の通り江戸時代の同キャンパスは医学部附属病院、農学部、浅野地区を除くとその大半が加賀藩上屋敷に該当しているが、本地点は絵図との比較から御先手組組屋敷にあたる場所である。

### 遺構と出土遺物

本地点から検出された遺構は、ほとんど江戸時代に該当するもので、近代以降の盛土造成によりほとんど攪乱を受けず、比較的良好な状態で検出された。主なものに柱穴列、地下室、井戸、土坑、採土坑等がある（図5、PL.6上）。

柱穴列は本地点東端部を南北に延びる3列、その西側に東西に延びる2列が検出された。前者は、江戸時代の状況が比較的良好に把握できる陸軍参謀本部作成の地図（1883年）と、現代の地図との対比より、加賀藩邸と組屋敷との地境の堀跡と考えられる。それぞれの柱穴列には対応関係は認められず、最低2回の建て替えが行われたものと考えられる。後者は、調査地点の北寄りに1列、ほぼ中央に1列が検出された。柱穴列間は約10間を測り、組屋敷内の地境堀と考えられる。これらの南北両側にはそれと並行する長方形土坑が密に存在している。柱穴列は確認されなかったが、中央部の柱穴列より南に約10間の位置にも同様の長方形土坑が存在することより、地境の可能性が高く、当地点内での各住区の区画は10間幅であったと考えられる。また、陸軍参謀本部の地図より東西の奥行きは20間を測ることから、1屋敷地は南北10間、東西20間の200坪の区画が割り当てられたものと考えられる。この坪数から本地点は与力の居住区であった可能性が高い（註1）。これらの柱穴に用いられた礎石はほとんどが抜かれていたが、残存しているものには石垣石や瓦を転用し

た礎石もある。

地下室は大型（室内で直立歩行が可能なもの）で階段を有すものが7基、有さないものが2基、小型で階段を有すものが3基、有さないものが11基検出された。このうち大型のものは各屋敷内より、2～3基検出されている。階段部にはいずれも補強のために杭を打ち板材を充てがった痕跡が確認され、使用度の高さを物語っている。その中でもSU327(図6, PL. 6下)は全体的に整形、補強が特に丁寧にされ、室部の天井際東西壁面には梁を固定する杭が南壁際と中央部に穿れ、中に角材を固定する礫が詰められていた(PL. 7上)。また南壁には方形に壁をくり抜き、灯火具の設置場所を設けていた。そして南壁面階段東側には「丑ノ九月廿四日初 同九月廿八日出来申候 内許」と構築日数が、東壁面には「市郎兵衛 次郎兵衛 □久蔵? 清次郎」と職人の名前が刻まれていた(PL. 7下)。

井戸は各住区毎に検出されたがその数はまちまちである。但し、構築場所が加賀藩邸との地境より、7～17mの間に集中していることが注目される。

採土坑は北寄りの2住区において、南北に主軸を有す不整楕円形、不整長方形を呈したものが加賀藩邸との地境付近に掘削されている。

出土遺物は、陶磁器類を中心にコンテナで約500箱と多量に出土している。他の江戸遺跡同様多量の徳利が出土しているが、それに付された釘書きが加賀藩邸内の調査では「久」系が主体であるの対し、本地点では「高サキ」が主体を占める。これは本郷追分に現存する「高崎屋」の徳利で酒屋の販売網を考える上で興味深いものである。また多量の土製玩具や、清朝磁器、フィゴの羽口などが出土している。フィゴの羽口に関しては本地点の組屋敷が鉄砲組とされていることとの関連も興味深い。これらの出土遺物は居住者の構成や生活状況等を考えるのに良好な資料となろう。

## 成果と課題

今回の調査では組屋敷の地割り構造をはじめ、与力、同心といった下級武士の生活様相や、屋敷内の土地利用を考える上で遺構、遺物双方の観点から良好な資料を得た。

組屋敷内の空間利用に関して、今回の調査で建物跡が全く検出されなかったことより、調査区が中山道から見て奥側の10間部分に当たり、家屋から外れた裏庭部分のためと考えられる。それを前提に論を進めると、家屋側に地下室、井戸、加賀藩邸側に採土坑が、各居住区境には塀列にほぼ隣接、並行して長方形土坑が構築されている。といった遺構配置が各居住区に認められ、裏庭の利用形態が、比較的画一化されていたと考えられる。こ

れは、同じく短冊状に区画された新宿区早稲田南町遺跡（西丸御持組組屋敷）の報告でも同様の土地利用形態が指摘されており(原1994)、短冊形の組屋敷における土地利用の1パターンとして捉えることができよう。

今後は、遺構の変遷を含む土地利用状況や、出土遺物から見た居住者の生活形態の復原をもとに、今までの調査で得られた加賀藩邸などの大名屋敷との比較や、組屋敷内の個々の屋敷間での比較など、さらに詳細な分析、検討を進めていきたい。（成瀬 晃司）

## 註

1. 東京大学史料編纂所，宮崎勝美氏のご教示による。

## 引用・参考文献

寺島孝一・成瀬晃司 1994 「文京区東京大学本郷構内の遺跡—工学部14号館地点—」

『東京都遺跡調査・研究発表会』18 発表要旨

原 祐一 1994 「第3節 新宿区早稲田南町遺跡の土地利用状況の復原」

『東京都新宿区早稲田南町遺跡—新宿区立早稲田第四アパート改築工事に伴う緊急発掘調査報告書—』

4

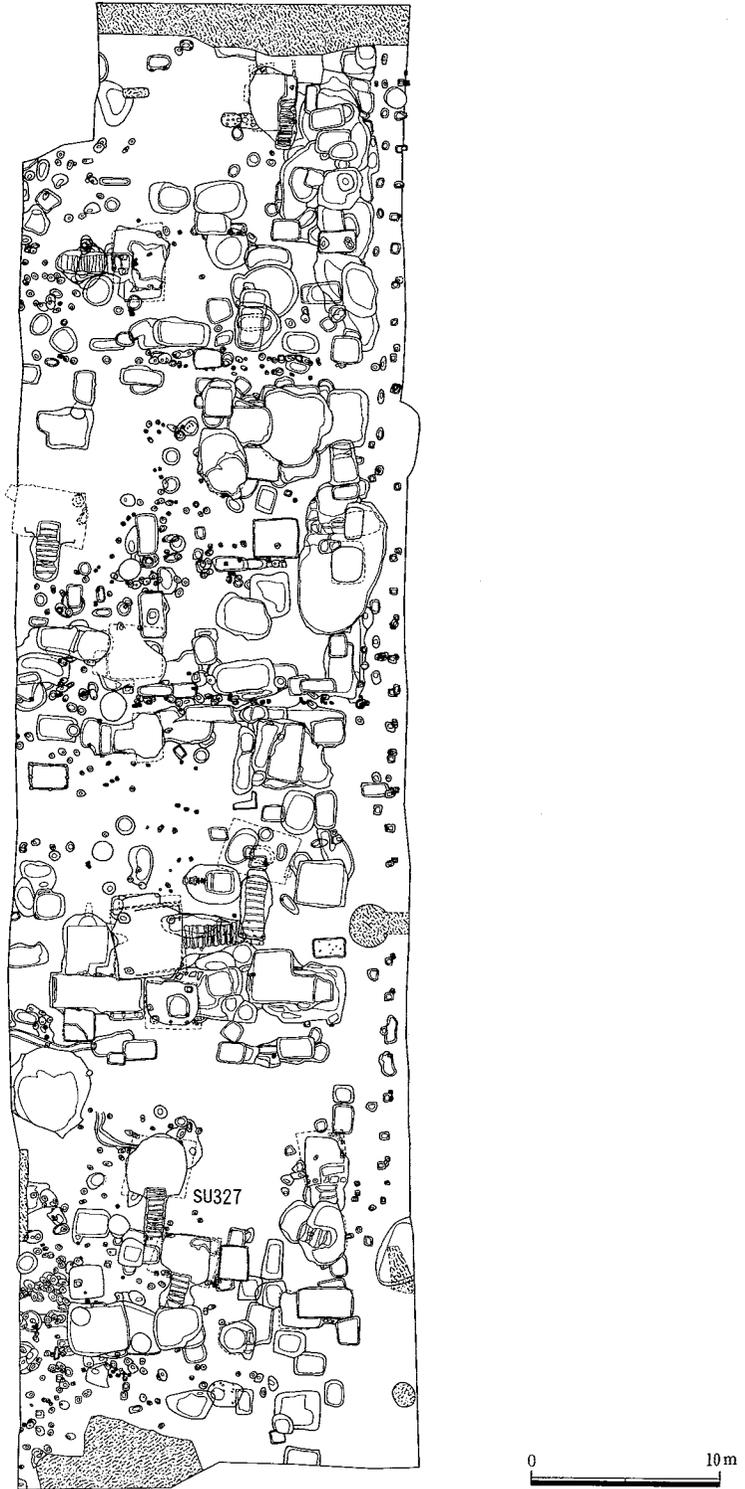


图 5 工学部14号館地点全体図

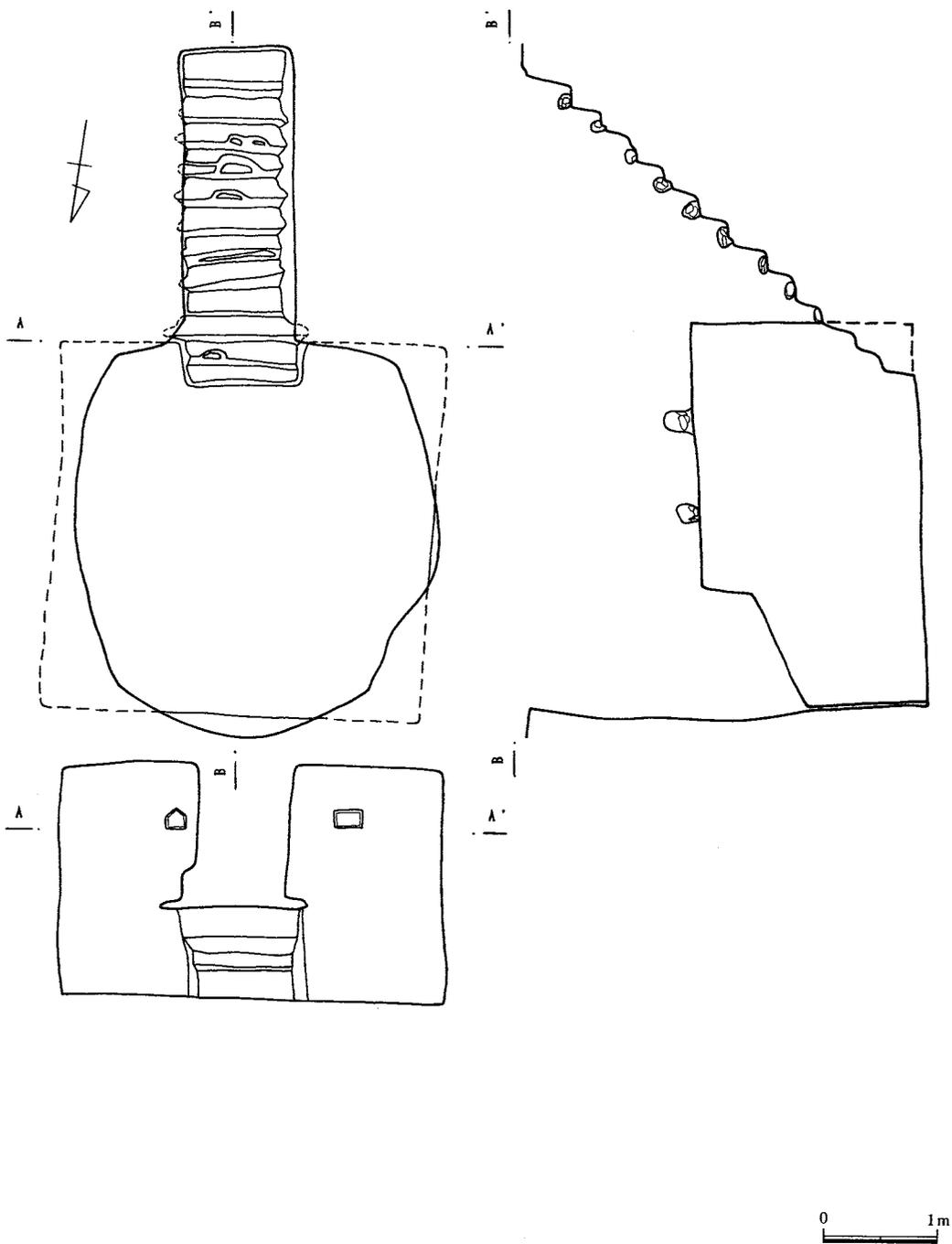


図 6 SU327

## 5 農学部図書館新営に伴う埋蔵文化財発掘調査略報

### 1 調査の経過

東京大学農学部図書館ではかねてから書庫の増築が計画されていた。しかし、調査地点の位置する農学部構内には江戸時代に水戸藩徳川家中屋敷が存在したため埋蔵文化財の発掘調査が必要であった。施設部から試掘調査の依頼を受けた埋蔵文化財調査室では、1992年10月に建設予定地の試掘調査を行った。その結果、江戸時代の遺構が存在することが確認されたため、建設予定地の調査対象範囲408m<sup>2</sup>に対して1993年3月9日から3月25日まで発掘調査を行った。

### 2 調査の成果

調査区全面にわたって畜舎および鶏舎の解体および立木の抜根等による攪乱が激しかったが、ほぼ全域で江戸時代の遺構群および遺物が検出された。(図7, PL. 8上)

江戸時代の遺構群は礎石列や柱穴列等の建築遺構こそ検出されなかったものの、調査区西側および南側を中心として、地下室(SU07)や円形土坑(SK08, 11)や溝状遺構(SD03, 09)等が検出された。

このうち、地下室(SU07)は上部で植栽痕(SK06)と重複して上半部を失っているが、断面形が袋状の形状を呈するもので、従来の農学部構内の発掘調査では類例がないものである。(PL. 8下)

円形土坑(SK08, 11)は断面形状の特徴として底部の中心部分が盛り上がっていることから、植栽痕と判断される。

西端で検出された円形土坑(SK10)は平面形が楕円形で底部は播鉢状を呈する特殊な形状が特徴である。埋土内から陶磁器類の破片に混じって、胎土に砂粒を多量に含む埴塼様の土製品と直径約1cm、長さ約5cmの棒状の鉛片が出土した。鉛の棒の一端には工具で切断した痕跡が残っており、火縄銃の銃弾の原料と考えられる。

発掘調査で出土した遺物は18世紀後半から19世紀前半の江戸時代後期の陶磁器および瓦等が主体となる。

なお、江戸時代の調査完了後、調査区内3ヶ所に2m四方の区画を設定し立川ローム層下部まで掘り下げたが、先土器時代の遺構遺物は全く検出されなかった。(武藤 康弘)

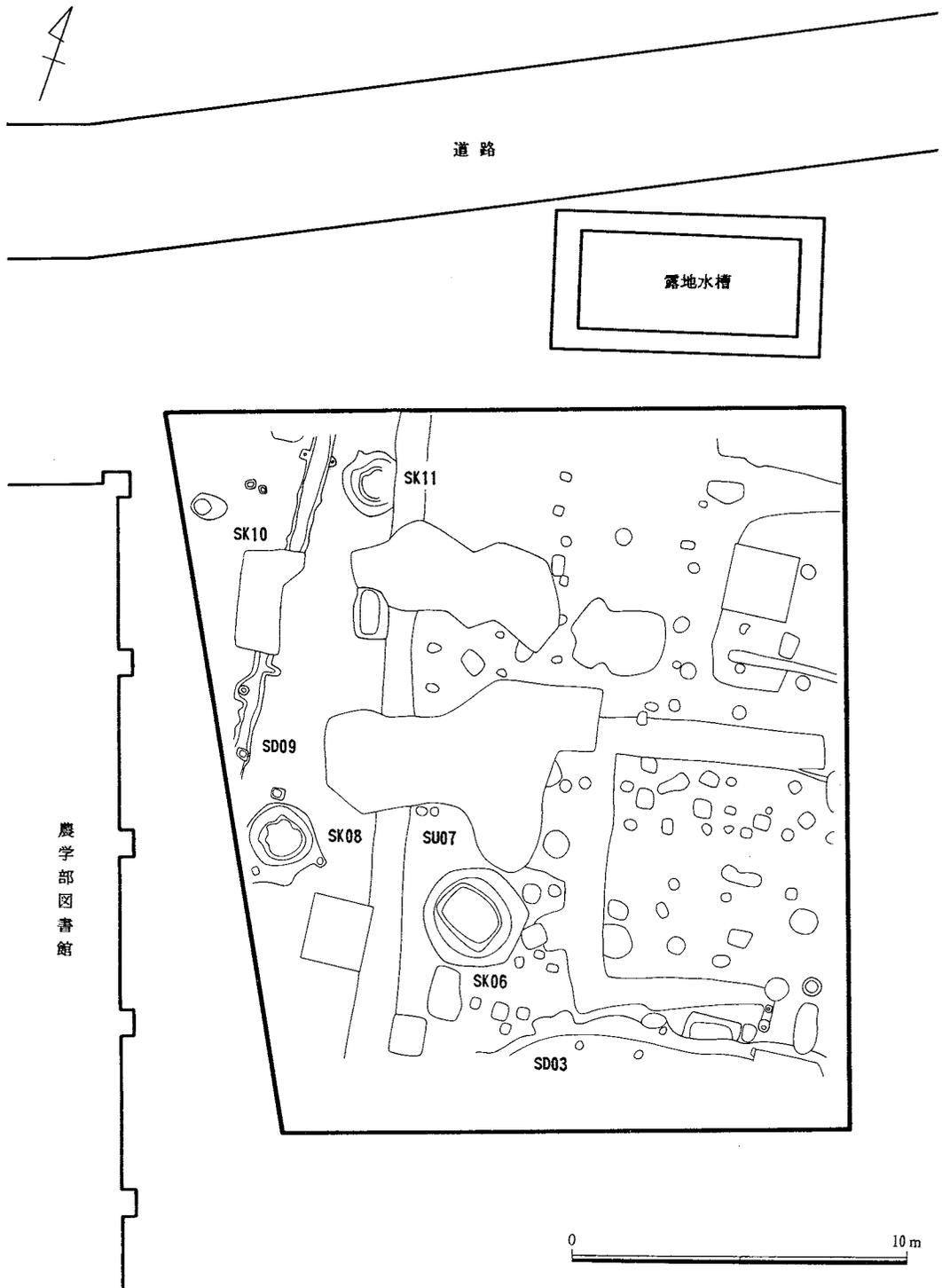


図7 農学部図書館地点全体図

## 6 医学部附属病院看護婦宿舎地点発掘調査略報

### 遺跡の位置と歴史的環境

本地点は、本郷台の東端にあたり、東京大学本郷キャンパスの東部、医学部附属病院の東端に位置している（第Ⅲ部-図1）。標高は約16mで本郷台の下位面（M<sub>2</sub>面）に比定され、安田講堂付近を境とする西側の上位面（M<sub>1</sub>面）につながっている（東京大学遺跡調査室1989）。東側は池之端門を見下ろす急崖であるが、これは後世の造作の結果であり、本来はキャンパス南東隅から不忍池方面に向かう無縁坂と同程度の緩やかな傾斜であったと考えられる。また本地点の南側（看護婦宿舎1号棟の南）には不忍池に開く谷が存在している。

本地点は、江戸時代には寛永十六（1639）年の富山藩成立によりその上屋敷に、それ以前は加賀藩の下屋敷に含まれていた。また、第3遺構面とする最下面（ローム層上の整地面）からは、縄文時代と、古墳時代の遺構が検出されている。

### 検出された遺構

本地点では3枚の遺構面が確認され、各面からおびただしい数の江戸期の遺構が検出された。第1、2遺構面では、その直上に焼土層が確認され、遺構面の下限を知る手がかりを提供してくれた。また第3遺構面では江戸時代の遺構の他に、縄文時代の遺構、遺物や、古墳時代の遺構が検出された。以下に各々の略説を報じる。

#### 1. 江戸・明治時代の遺構

第1遺構面（図8）：本遺構面は、表層を厚さ約10cmのロームの盛土により整地されており、多数の江戸時代の遺構とともに、明治時代初期の建築遺構も検出された（SB02）。これは長方形の溝状の掘り方の中に礎石を配し、その周囲を礫で埋め尽くす基礎構造である。またこの内部には1間間隔で配された礎石が部分的に残存していた。この基礎構造は、外来診療棟地点で検出された医学校本館のそれと類似する様相を呈しており、1877年前後に建築された木造建築の基礎と考えられる（寺島・成瀬1993）。

江戸時代の建築遺構では、SB31（PL.9上）、SB49などがある。個々の柱穴の構造は円形の掘り方の中に、根石として破碎礫もしくは扁平円礫を敷き詰め、その上に礎石を置いたものであるが、ほとんどの礎石は抜き取られていた。SB31の周囲には焼土層が堆積し、

またロームの整地層も火災による被熱で暗赤褐色に変色していた。この火災の年代に関しては、本遺構面から出土した遺物の年代観をはじめ、SB31が19世紀代と考えられる絵図に描かれた建物に比定できる可能性が高いことから、文献史料に見られる文政八（1825）年の富山藩上屋敷が焼失した火災に伴う可能性が高い。

本遺構面からは建築遺構の他に、植栽痕、井戸などが検出されているが、SE12, 13, 18とした井戸は、確認面より約2～2.5mの深さで坑底に達している。なかでもSE13に関しては坑底に常滑焼の大甕が埋設されており、その性格が目される。

第2遺構面(図9)：本遺構面は、玉砂利を含む硬化面が調査区一帯に拡がり、上下2面に対し、遺構数も著しく少ない。また本遺構面は調査地点西側において、最大厚約20cmを測る焼土層によって覆われている。この焼土層はSU168の覆土にもなっており、その状況から調査区外にかなり拡がっていることが推測される。火災の年代に関しては、遺物の年代観より元禄十六（1703）年の火災が有力視され、それが本遺構面の下限年代になると考えられる。

本遺構面の建築遺構には、SB186 (PL. 9下)、SB195がある。いずれも長方形を呈する溝状の掘り方内に半間間隔で礎石を配する構造である。年代は異なるが、類似する基礎構造の建築遺構に御殿下記念館地点から検出された3、4号遺構などがある（東京大学埋蔵文化財調査室1990）。これらは絵図との対比から蔵の基礎と断定されており、本遺構もその可能性が考えられる。

第3遺構面(図10, PL.10上)：本遺構面は、本来緩斜面であった旧地形を江戸時代初期に平坦に削平した面で、ローム層を確認面としている。そのため江戸時代以前の遺構も、本遺構面より確認されている。江戸時代の遺構では北側にSK299とした巨大な採土坑が存在する。中央にはSD535, 503とした溝状遺構があり、それに挟まれた空間には塀列や、長方形土坑が複数存在する。南にはSU254とした大型の地下室とピット群が存在する。これらのピットの中には後述する江戸時代以前の遺構群に帰属するものも含まれていると考えられる。SK299の覆土の一部は焼土層で形成されており、その中から、中国、朝鮮、ヨーロッパの舶載品を含む陶磁器が多量に出土している。火災の年代は、肥前磁器の年代観と、文献史料から下限を天和三（1683）年以前に位置付けることができる。

## 2. 江戸時代以前の遺構

江戸時代以前の遺構には古墳時代の住居址と、縄文時代条痕文系の炉穴、またそれらに帰属する可能性のあるピット、炉址などが検出された。

古墳時代の住居址は、前期に位置付けられるものが6基、後期に位置付けられるものが1基検出された。調査区西側に位置する住居址は、江戸時代の削平によって大きく破壊され、張床がかろうじて残存する程度である。それに対し、東側の住居址は比較的良好な遺存状態で確認され、特に SI1001とした住居址は、偶然にも江戸時代の遺構による破壊をほとんど受けず、ほぼ完全な形で検出された (PL.10下)。

縄文時代の遺構は調査区中央付近より、条痕文系 (絡縄体圧痕文) の土器を伴う炉穴が1基検出された。

これらの他に、暗～黒褐色土の覆土を持ち、両時期の遺物を包含するピットが多数検出されており、それらの中には該期に帰属する遺構が含まれると考えられる。

## 成果と課題

富山藩邸に関する調査は、中央診療棟地点で一部分を調査したものの、本格的な調査は今回が初めてである。本調査の成果として3枚の遺構面を確認したが、各々が火災の痕跡を持ち、その下限にアプローチできる資料を得られたことが第1に掲げられる。また、第1遺構面からは御守殿の北側部分、第2遺構面からは土蔵といった建築遺構が、第3遺構面からは溝、塀など空間を区画する遺構群が検出されたが、興味深いことに第1、2遺構面の主軸方位はN-8°-Eを示しているのに対し、第3遺構面の主軸方位はN-14°-Eを示しており、17世紀後半代に空間利用の大きな変化があったことを窺わせている。

(成瀬 晃司)

## 参考文献

- 東京大学遺跡調査室 1989『東京大学遺跡調査室発掘調査報告書 1 東京大学本郷構内の遺跡 理学部7号館地点』
- 東京大学遺跡調査室 1990『東京大学遺跡調査室発掘調査報告書 3 東京大学本郷構内の遺跡 医学部附属病院地点』
- 東京大学埋蔵文化財調査室 1990『東京大学埋蔵文化財調査室発掘調査報告書 4 東京大学本郷構内の遺跡 山上会館・御殿下記念館地点』
- 寺島孝一・成瀬晃司 1993「東京医学校本館の基礎遺構」『遺跡にみる幕末から明治』江戸遺跡研究会第6回大会発表要旨

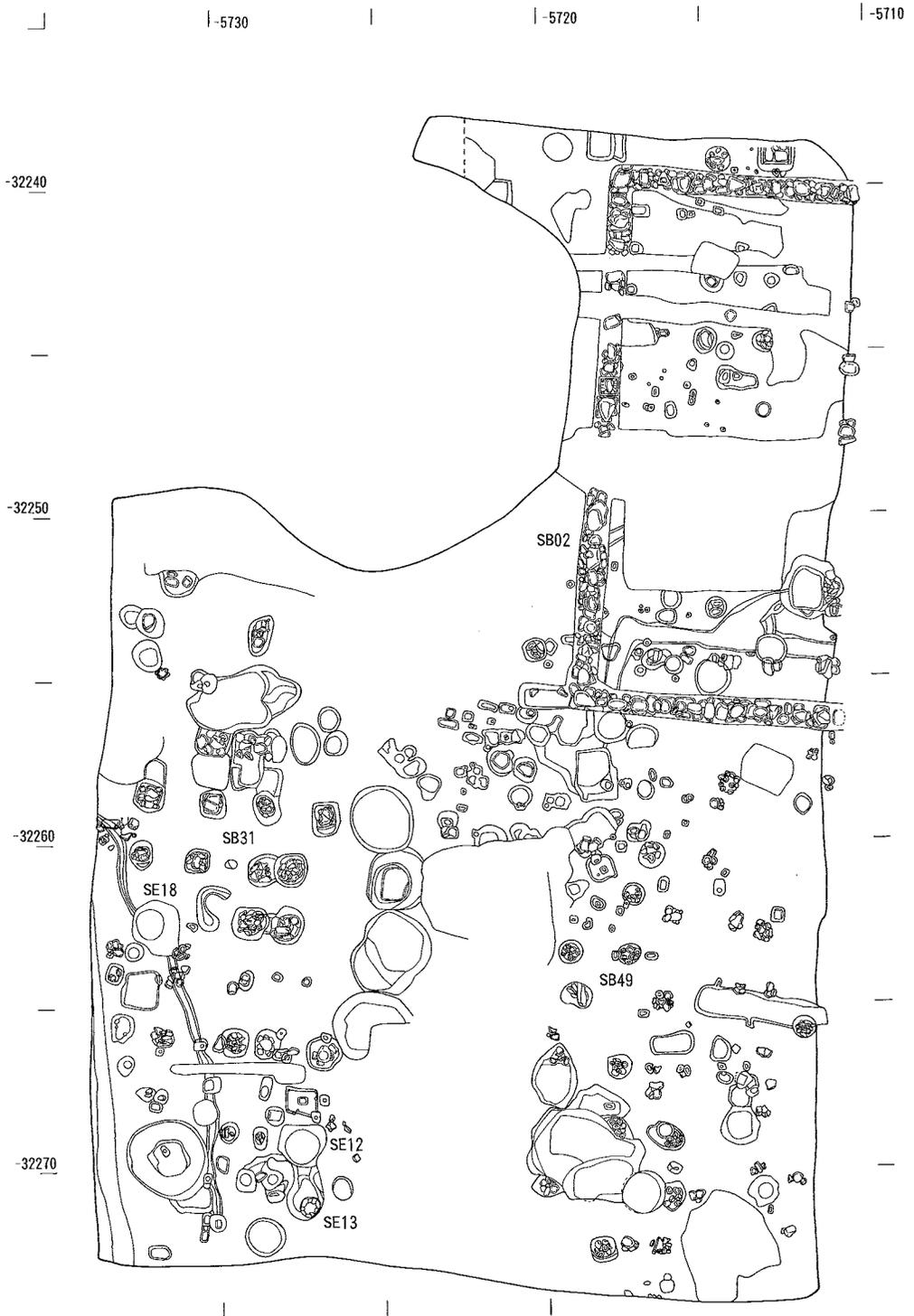


図8 看護婦宿舍地点 第1遺構面全体図

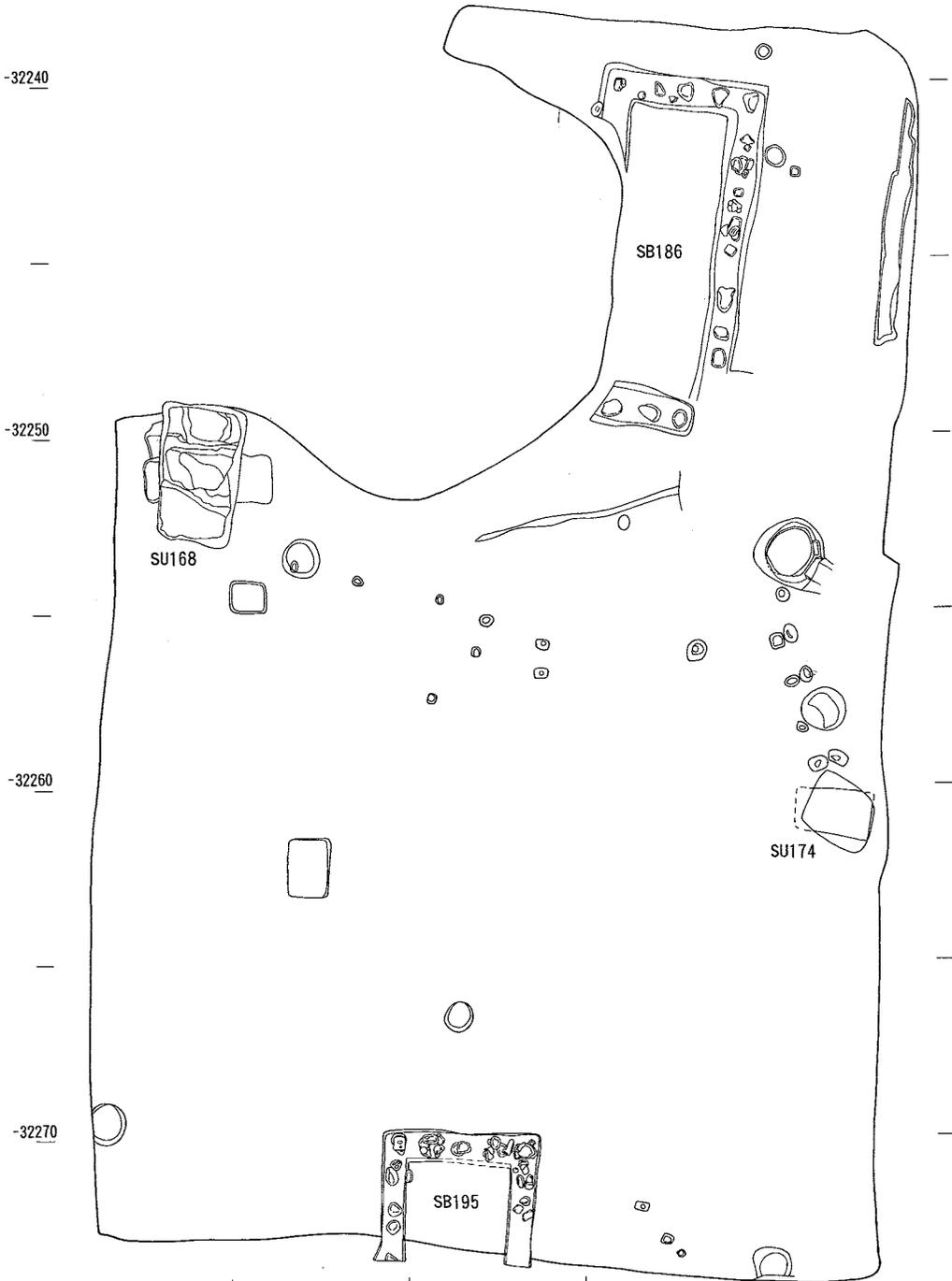


図 9 看護婦宿舎地点 第 2 遺構面全体図

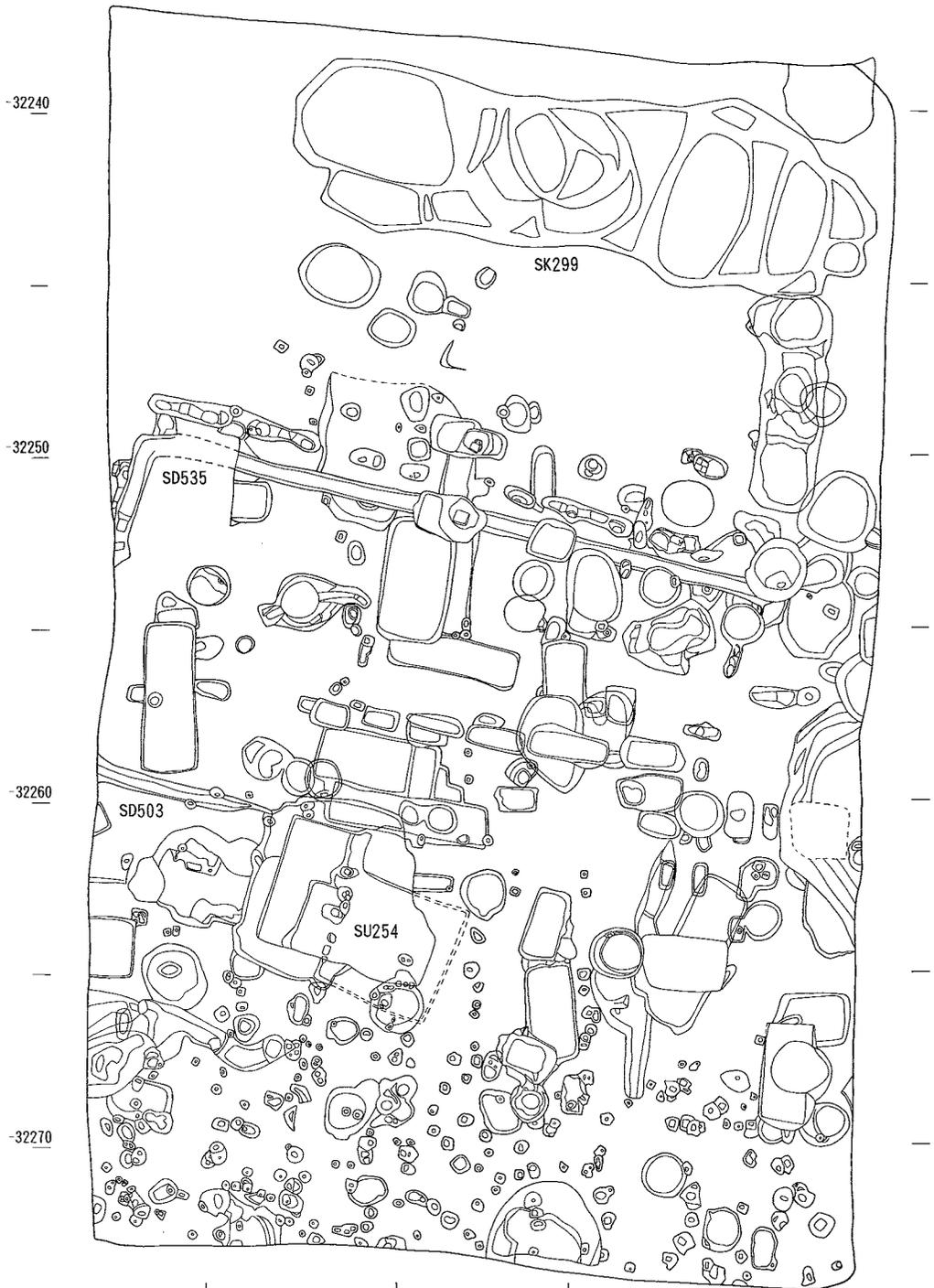


図10 看護婦宿舎地点 第3遺構面全体図（江戸時代）

## 7 教養学部情報教育棟新営に伴う埋蔵文化財発掘調査略報

### 1 調査の経過

教養学部ではかねてから情報教育棟の新営が計画されていた。教養学部から建設予定地の埋蔵文化財の確認の依頼を受けた埋蔵文化財調査室では、1993年5月に試掘調査を行った。その結果、縄文時代の集石遺構とそれに伴って縄文土器が検出されたため発掘調査が必要であると判断された。そこで、建設予定地940m<sup>2</sup>を対象として1993年8月20日から10月20日まで発掘調査を行った。

### 2 調査の成果

調査地点は縄文時代の遺跡として明治時代から著名な駒場東京大学構内遺跡の範囲内に位置する。旧地形が正確に表現されている1880年測量の第一師管地方迅速測図『内藤新宿』（2万分の1）によると、調査地点は目黒川の支流で駒場構内のグラウンド付近に源泉をもつ小河川によって開析された舌状台地の先端に位置していることが明らかになった。付近には縄文時代の遺跡が多く、目黒川に隣接した大橋遺跡では100基以上の竪穴住居跡から構成される縄文時代中期の拠点集落が発掘されている。本調査では上層で明治期の建物跡が、下層では縄文時代の集石遺構等が検出された（PL.11上）。

上層の遺構は黒褐色土の上面で検出された。小型方形の柱穴が密集して配列されており駒場農学校時代の建物跡と考えられる。

下層の遺構は縄文時代のもので褐色土層中で遺構遺物が確認されている。土器は縄文時代草創期、早期および中期、後期の各型式が検出されているが、中心となるのは集石遺構が確認された早期である。集石遺構は調査区の中央で南北10m、東西8mの範囲で散漫に礫が分布しているが、中心部分ではやや分布が密になる（PL.11下）。礫は総数772点で、主要な石材は砂岩である。焼成による赤化の程度はそれほど顕著ではない。集石遺構の外縁部で縄文土器が5片出土している。いずれも無文土器であるが、器面調整の特徴や長石粒を含む胎土の特徴から早期の撚糸文土器の終末期の無文土器と考えられる。土器の出土状況から集石遺構も同時期のものと判断される。一方、調査区の東側では、ローム層にやや食い込む状況で無文土器が6片出土している。これらの土器はいずれも粘土帯接合部分に外面から指頭押圧を連続的に加えていることが特徴的である。胎土の特徴や出土状況から隆線文土器以前の草創期前半の土器と考えられる。

（武藤 康弘）

## 8 農学部校舎（7号館）新営に伴う埋蔵文化財発掘調査略報

### 1 調査の経過

農学部ではかねてから校舎（7号館）の新築が計画されていた。しかし、建設予定地の位置する農学部構内には江戸時代に水戸藩徳川家中屋敷が存在したため埋蔵文化財の発掘調査が必要であった。そこで、施設部から確認調査の依頼を受けた埋蔵文化財調査室では1992年1月に試掘調査を行った。その結果、江戸時代の遺構・遺物が検出されたため事前調査が必要となった。建築工事が2期に分けて行われるため、発掘調査も2期に区分し、I期分として水産学科水槽跡地の1170m<sup>2</sup>を1992年10月6日から11月16日まで調査し、II期分として北側への増築部分1000m<sup>2</sup>を1993年11月3日から11月26日まで調査した。

### 2 調査の成果

調査区全面にわたって江戸時代の遺構群が検出された(図11)。しかし、幕末期に東側に傾斜して大きく削平をうけており、江戸時代以前の遺構・遺物は全く検出されなかった。

I期調査区では江戸時代の遺構群として礎石列等の建築遺構は全く確認されず、調査区西側で柱穴列が僅かに検出されたにとどまる(PL.12上)。主要な遺構として、地下室や円形土坑および方形土坑が上半部が削平によって失われ下半部のみが検出された。また、溝状遺構(SD01)は傾斜面にそって東西にのびており、埋土内から19世紀前半の時期の陶磁器が大量に出土した。この遺構の年代が削平地業の時期を示しているものと判断される。また、調査区北西角ではこの溝状遺構に接続する溜枘の遺構も確認された。

II期調査区も、I期調査区と同様に東側に傾斜して削平をうけている。東端部では武蔵野ローム層下部にまで掘削が及んでおり、江戸時代の遺構群も西側でしか確認されなかった。遺構はI期調査区からのびる溝状遺構と円形土坑が確認された(PL.12下)。これらの遺構とは別に調査区西側では、斜めに横切る石垣が確認されたが、基礎部分にセメントを使用していることから近代以降のものと判断される。

出土遺物はI、II期調査区とも江戸時代後期のものが主体となる。遺構群も概ね同じ年代が与えられる。また、遺構は検出されなかったが、縄文時代晩期の土器片も僅かではあるが確認されている。この他に、江戸時代の整地面直上の青灰色粘土層から幕末から明治初年のスナイドル銃の弾丸が2点出土しており、1877年頃付近にあった「東京共同射的会社」の射撃場に関連する遺物と考えられる。(武藤 康弘)

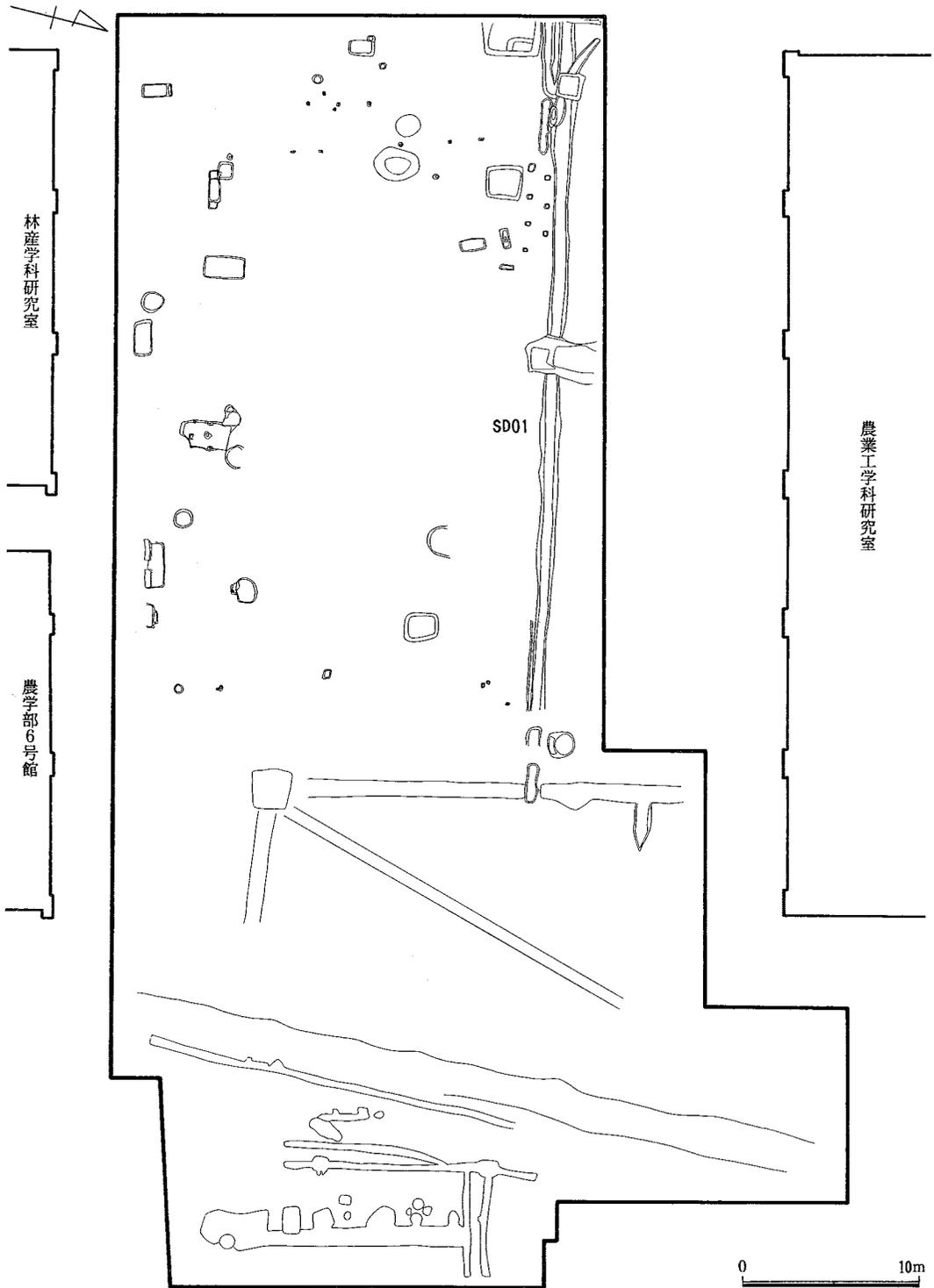


図11 農学部7号館地点全体図

## 9 農学部総合研究棟新営に伴う埋蔵文化財発掘調査略報

本調査は農学部弥生キャンパスの南側，言問通りに面して全学的な研究施設を新営する計画に伴い予定敷地内の調査を行った。調査区域は江戸時代は水戸藩中屋敷内であることが江戸図等より確認されており，当初より水戸藩中屋敷に伴う遺構群が検出されると想定された。発掘調査期間は1993年11月18日から12月28日で，調査面積は1007m<sup>2</sup>である。調査区南側中央に農学部通用口があり，そこから切り通し状の道が北西方向に取り付けられている。調査は道を除く東側（東区）と西側（西区）に分けて行われた（図12）。土層の堆積状況は，調査区全体が台地上から東側に落ちる緩斜面に立地しているため，盛土が東側に厚く，東区では1 m 以上，西区では約50cm の厚さで確認された。この近代以降の盛土はローム土の上から確認されており，近世の生活面，盛土等は確認されなかった。したがって遺構確認面は両区ともローム上面である。

東区では江戸期の遺構は土坑が数基確認されたにすぎない（SK28，SU29など）。その他は東京府癡狂院もしくは第一高等学校に伴う遺構群である。東京府癡狂院が明治になってまもなく当該地に建築され，ついで第一高等学校が神田より本郷に移転したのは1889年である。調査時点では検出されたピット群や排水管等がどちらに伴うか判断できなかったが，1887年に刊行された参謀本部陸軍部測量局の1/5,000の地図では東京府癡狂院の範囲が調査区の東方に位置しているため，これらの遺構は第一高等学校のものである可能性が強いと推定される。西区では東区で確認されていた近代のピット群が東側に展開していた。江戸期の遺構は東区より密に分布しており，地下室，井戸などが特に北側に集中して確認された。地下室は4基確認された。東区にある1基は小型の地下室であるが，西区の地下室はいずれも簡単ではあるが階段を有している。井戸は4基，いずれも西区に確認された。遺構の年代はほとんどが18世紀前半代に集中しており，それ以降の遺構は井戸が1基あるにすぎない。このような状況は弥生キャンパス全体的に指摘できることで，あるいは隣接する外様一の雄藩である加賀藩監視の意味で敷地は残したものの，18世紀後半以降に屋敷を縮小した可能性も考えられる。

(堀内 秀樹)

4

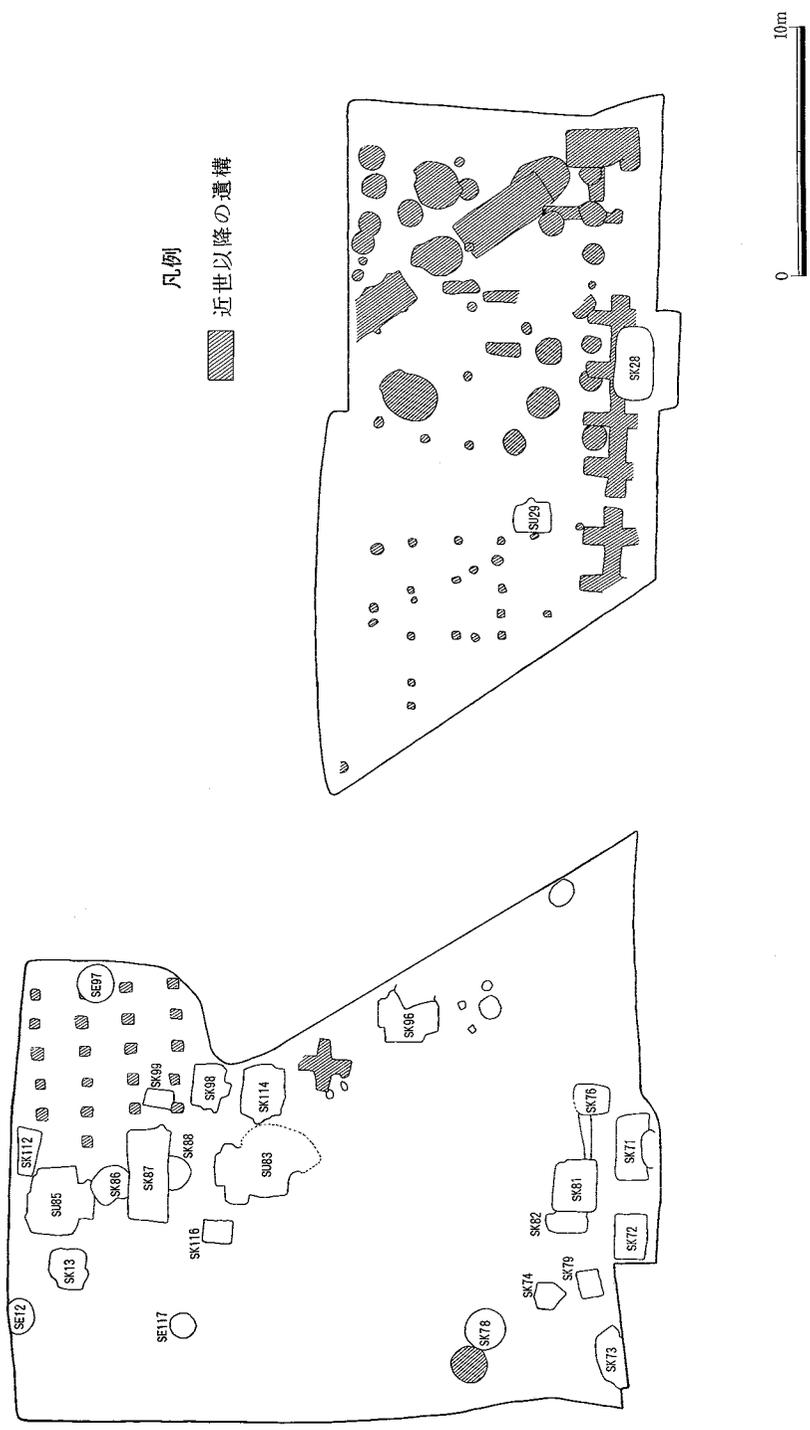


図12 総合研究棟地点全体図

## 10 工学部校舎（1号館）新営に伴う埋蔵文化財発掘調査略報

### 1 調査の経過

工学部ではかねてから校舎（1号館）の北側への増築が計画されていた。1993年5月の試掘調査で江戸時代の遺構遺物が確認されたため、建設予定地616m<sup>2</sup>に対して1993年12月6日から1994年2月10日まで発掘調査を行った。

### 2 調査の成果

調査地点は江戸時代の加賀藩上屋敷の下級武士の長屋に相当する部分である。東西に細長くのびる調査区の中央には、大正時代の旧館の基礎が存在し、東側では通信塔とその避雷針のアースによって大きく攪乱を受けていたが、調査区全面にわたって江戸時代の遺構群が検出された（図13，PL.13）。

遺構群は江戸時代前期と後期の2期に大きく区分される。

江戸時代前期の遺構群は、調査区の東端で溝状遺構（SD40）とその周辺で円形土坑が検出されている。また、調査区中央西側では小型の土坑および柱穴等が集中している。調査区中央東側では、大型の円形土坑（SK02）が確認された。

江戸時代前期の遺構群からは陶磁器の他、銭貨や瓦等が出土した。陶磁器の年代からこれらの遺構群は17世紀後半の年代が与えられる。またSK02からは、梅鉢文の軒丸瓦が大量に出土したが、この中には金箔瓦や山上会館地点でしか出土例のない特殊平瓦が含まれている。

江戸時代後期の遺構群は調査区東側の巨大土坑（SK01）に限定される。土坑は本来採土坑として掘削されたものと推定され、確認された範囲で東西12.5m、南北6m以上、深さ5m以上の規模をもつ。この土坑はその後廃棄場所として利用されたため、埋土内部から大量の遺物が出土した。特に下層の粘質土層からは下駄、桶や建築材等の木製品や食用に供されたと考えられる犬の骨格が多数発掘された。また、上層からは江戸時代後期の陶磁器が大量に出土した。特に、徳利が多く完形品だけでも50個体を優に超える量である。また、陶磁器には墨書の施されたものも多い。遺物の年代等の検討から、遺構の埋没の年代は18世紀末から19世紀の前半と考えられる。

この他に、調査区中央西側の江戸時代の遺構面の下層の黒色土中から縄文時代後期・晩期の土器片が発掘された。

（武藤 康弘）

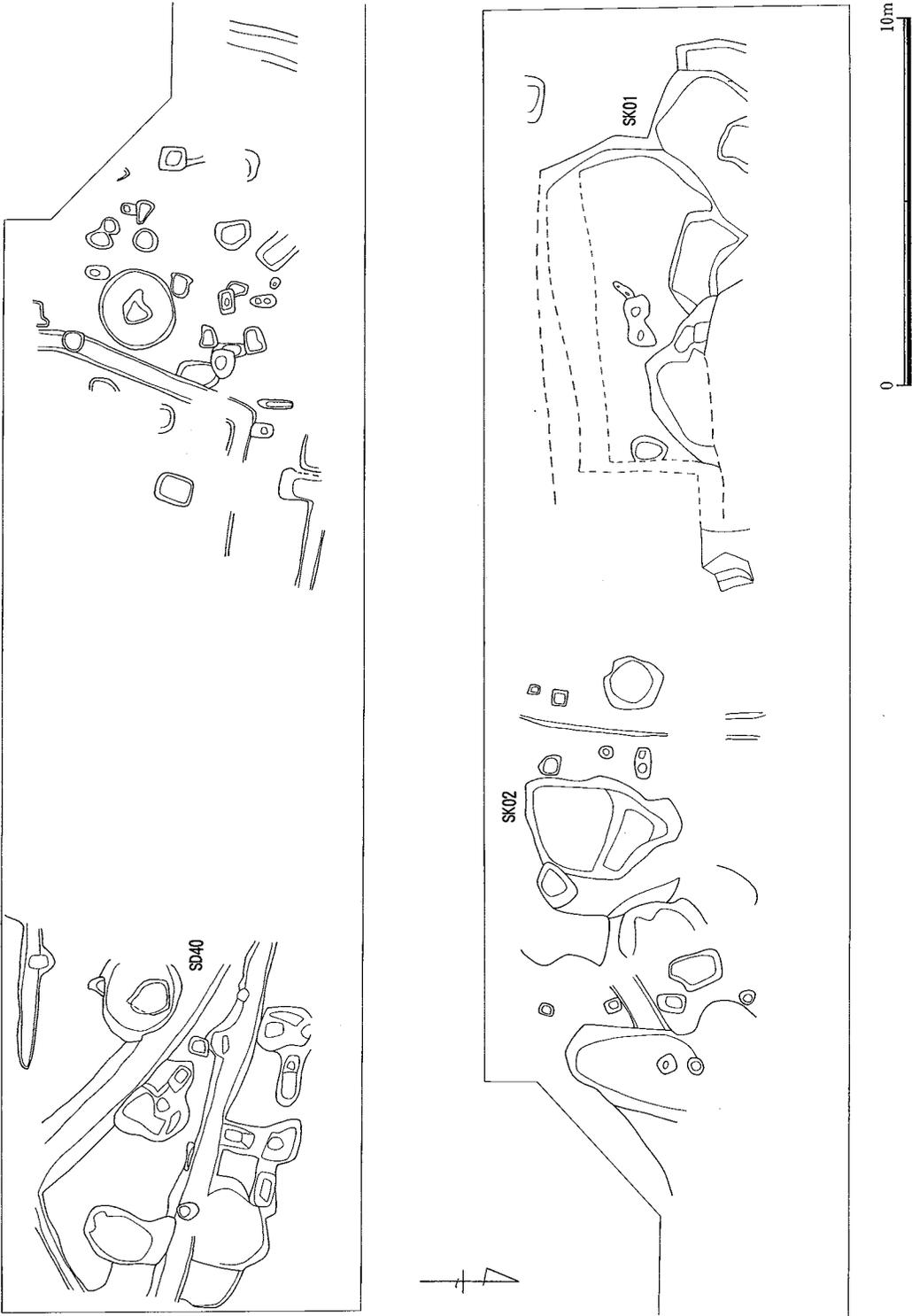


图13 工学部1号館地点全体图(上:東側調査区 下:西側調査区)

## 11 医学部附属病院 MRI—CT 地点発掘調査略報

### 遺跡の位置と歴史的環境

本地点は看護婦宿舎地点の南西側にほぼ隣接し、本郷台地の東端上に位置する（第Ⅲ部-図1）。本地点も江戸時代には富山藩上屋敷の一部に含まれ、事前に行われた試掘調査の結果、看護婦宿舎地点同様3枚の江戸時代の生活面が認められた。さらにトレンチの1つからは、古墳時代前期の住居址と考えられる遺構が検出され、看護婦宿舎地点における該期の集落が本地点まで広がっていることが確認された。

### 検出された遺構

調査区の西側約半分は、大学の下水本管のマンホールなどにより破壊を受け、それ以外にも複数の支管が通っているため、遺存状態はかなり悪いものであった。以下に遺構面毎に略説していく。

#### 1. 江戸時代の遺構

第1遺構面（図14）：調査区中央部に地下室（SU04）が、その南側に井戸が存在する程度で著しい攪乱を受けてはいるものの遺構密度は低いといえよう。SU04は天井部を持たない形態の地下室で、2基の重複と考えられる。

第2遺構面：硬化面が確認されたが、遺構は検出されなかった。また看護婦宿舎地点で認められた焼土層も本地点では堆積していない。

第3遺構面（図15，PL.14上）：ローム上の整地面である。ドーナツ形を呈した形態を含む多数の植栽痕や、不整形の土坑が中心である。

#### 2. 古墳時代の遺構

古墳時代前期に属する5基の住居址が検出された（PL.14上）。その中でもSI04は、1辺約10mを測る大型の住居址で、床面付近からは半完形の土器や（PL.14下）、滑石製の勾玉が出土している。

（成瀬 晃司）

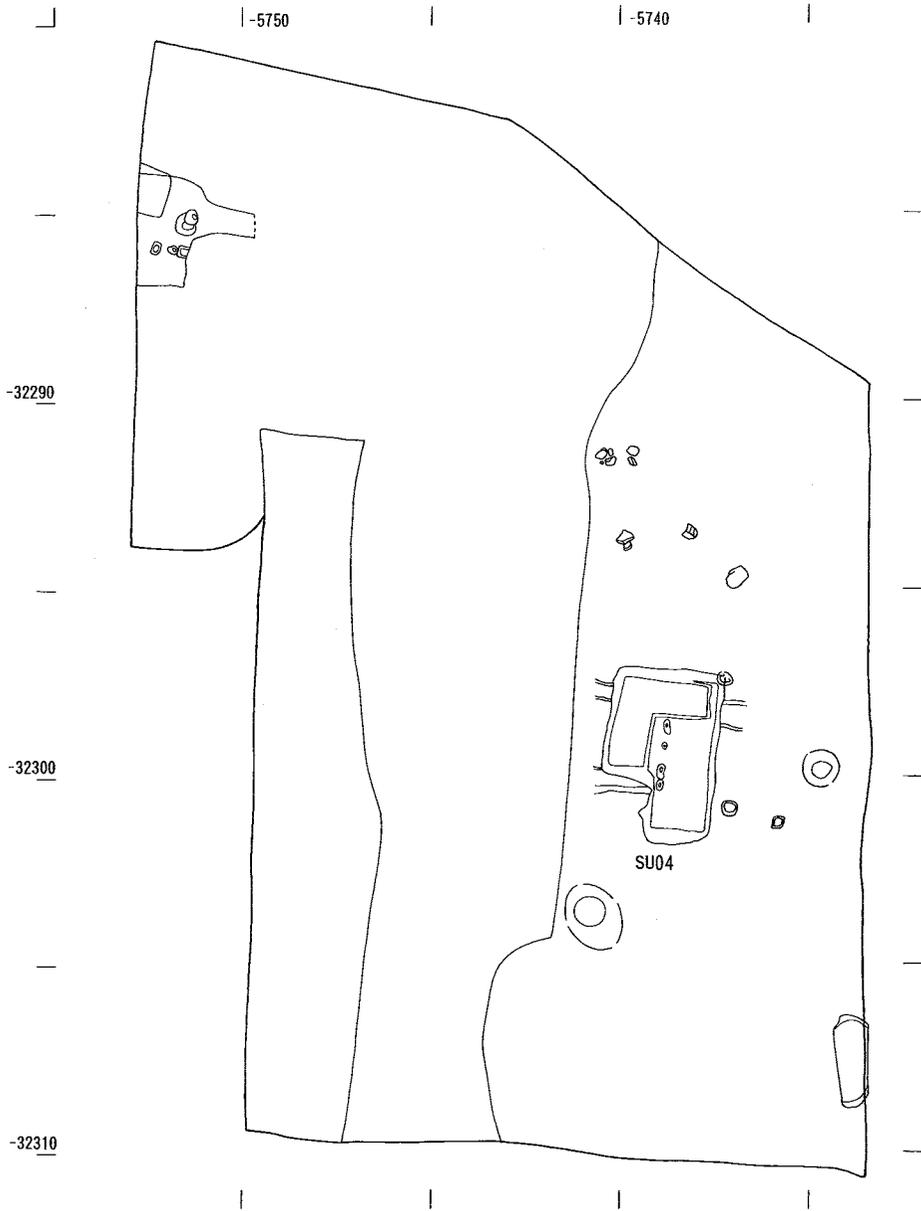


図14 MRI-CT 地点 第1遺構面全体図

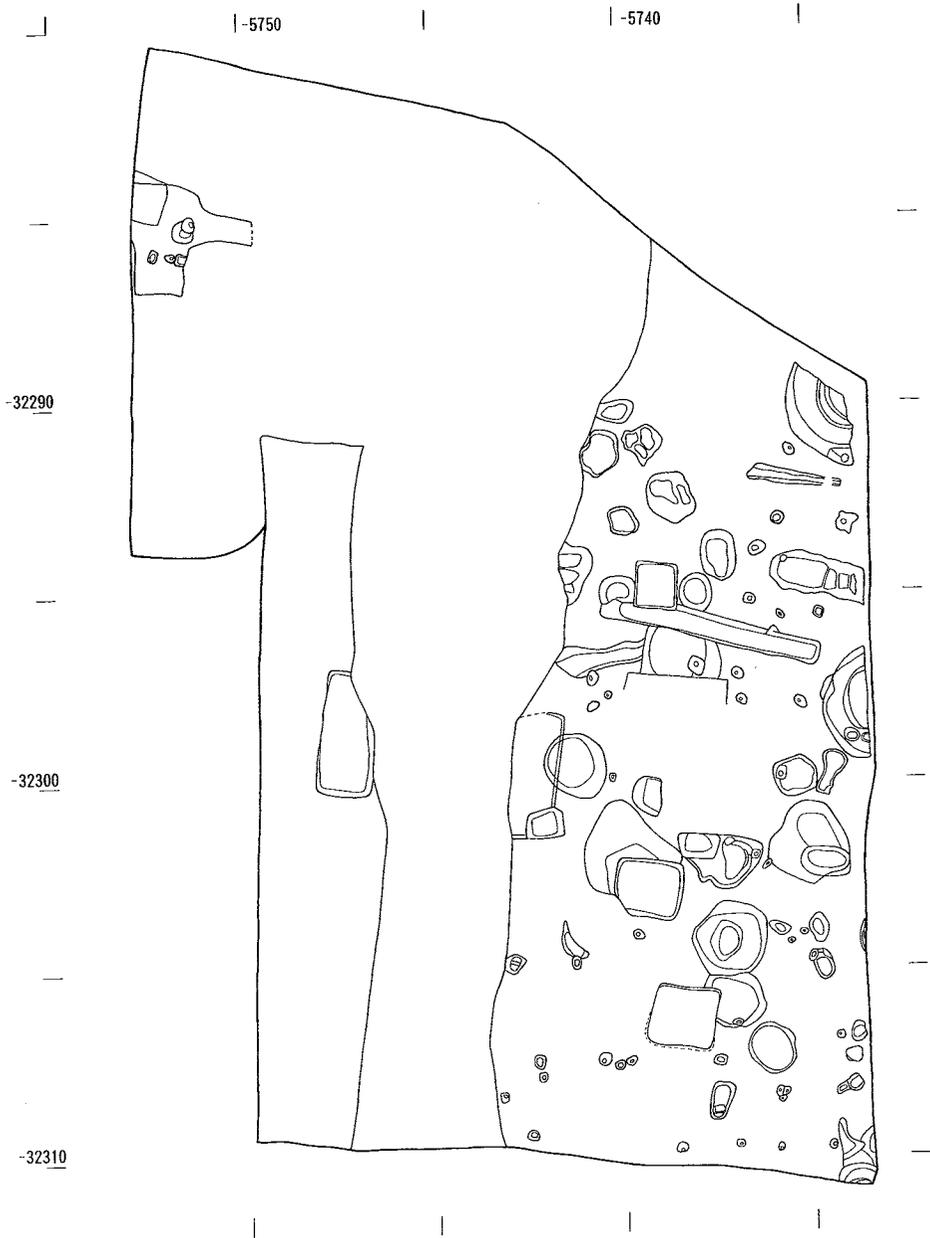


图15 MRI-CT 地点 第3遺構面全体図（江戸時代）

## 12 総合研究資料館増築に伴う埋蔵文化財発掘調査略報

本調査は総合研究資料館増築に伴う埋蔵文化財発掘調査である。発掘調査期間は1994年2月14日から4月8日のほぼ2カ月間で、調査面積は約600m<sup>2</sup>である。遺跡は調査区中央及び北側資料館寄りに総合資料館建築の際の大きな攪乱によって削平を受けており、全体の様子は窺えなかった(図16)。にもかかわらず、調査の主目的である江戸時代の前田家上屋敷跡関連遺構の他に、断片的ながら明治時代の懐徳館関連遺構が検出され、考古学、建築学的に非常に意味の大きいものとなった。

### 1 江戸時代(前田家上屋敷跡関連遺構)

**検出された遺構群の概要：**江戸時代の遺構面は、2枚にわたって確認された。上の黒色土面(以下「上面」と略す)、下のローム面(以下「下面」と略す)である。上面は調査区ほぼ全域にわたって認められ、南側より北側に向かって厚く堆積していた。中央の大きな攪乱を挟んで南北にはしる溝(南側にはブリッジがある)より西では上面は叩き締められ、硬化していた。土地利用は、この溝を挟んで大きく様相が異なることが看取できた。溝の東側では、坑底、壁等がしっかり作られる遺構が多く、地下室(図16中斜線部)、小ピットなど建物の存在を想定させる遺構が密に展開しているのに対し、西側では不定形の溝、土坑等、遺構はいずれも浅く、規格性はない。また、東側の遺構の多くは上面より確認されたのに対し、西側の多くは下面より検出された。このことは上面の時期には東側には建物が存在し、西側はオープンスペースであったことを物語っている。

絵図面をみると当該調査区付近は南北方向に主軸を有する長屋群が6棟とその西側には「馬場」と記される南北に長い区画が存在している。この馬場は現存している本郷邸の絵図面でもっとも古い元禄元(1688)年に作られた絵図に既に存在し、以後、幕末まで続いている。

上面の遺構検出の状況はまさにこれと符合するものであり、少なくとも元禄期以降、調査区東側、地下室の密に分布している部分は長屋等の家臣居住空間であり、西側、硬化面の確認された部分は馬場の空間であると推定される。

下面検出の遺構は、中央やや北方に東西方向に主軸を有する溝が確認されている他は、ピットが全体的に散漫に認められるのみである。この溝は他のすべての遺構に切られ、遺

物も17世紀前半の瀬戸・美濃の製品が出土している。また、溝の主軸もその他の遺構が調査時のグリッド軸に対してやや東に振れているのに対しほぼグリッド軸に平行していることなどから、下面は少なくとも元禄以前に構築されたことが明らかで、おそらく本郷邸が上屋敷になる契機になった天和2年(1682)の火災以前の遺構面であろうと考えている。

**検出された遺構：**地下室は、全部で13基確認された。以前調査を行った法学部4号館地点などの下級家臣団の居住区とされる長屋に伴うものに規模、形態が類似している。いずれも袋状を呈し、深さ約2.5～3m、床面の広さ2～4畳程度で、階段等の付帯施設はない。また、床、壁面の整形もラフで、工具痕がそのまま残るものも少なくない。

井戸は2基確認されている。とくに調査区西側を南北にはしる2本の溝のすぐ東側にある井戸は、出土遺物が18世紀後半のものが主体的であり、時期的なものを考慮すると馬場に付帯する井戸であろう。この井戸は非常に丁寧に構築されており、井桁、井戸側、上屋等の施設の痕跡が明瞭に認められた。上屋はおそらく釣瓶を下げたものであろう。

溝は上面に3本、下面に2本ある。上面の溝は前述した中央の攪乱を挟んで南北にはしるものは長屋空間と、馬場空間とを仕切る溝であろう。簡単な板塀等の存在が想定される。南側に存在する半間のブリッジは出入口であったと推定される。これより西側に5間離れて前述した溝と平行する溝が2本確認された。あるいは馬場のコース取りをした区画溝であろうか。

## 2 明治時代(懐徳館関係の遺構群)

懐徳館は1907年に前田侯爵が明治天皇行幸のために建築された建物で、洋館と和風別館及びそれに附属する庭園とでなる。調査開始当初より調査区に旧懐徳館洋館が位置することが絵図面等より確認されていた。何らかの形でその痕跡が認められることが推定されたが、発掘では煉瓦積みの基礎及び地階の玄関、便所にあたる部分が予想以上に良好な状態で検出された。

基礎は非常に強固に作られている。外壁部分では、まずコンクリートによって3段、そのうえに煉瓦を長辺のみが連続するように乗せ、短辺のみが連続するものと交互に積み上げている。コンクリートは2～5cm程度の玉砂利が多く含まれてはいるが、比較的堅牢であった。煉瓦も3段、計26層、1.8mの厚さを測る。コンクリート部分の上に2層積み上げ、その上には短辺の半分、幅を減じて2層、さらに短辺の半分を減じて2層積み上げている。上下水等の配管はトンネル状に壁を穿ち、その天井はアーチ状に煉瓦を配し、強化している。また、外壁には煉瓦の防腐、地階の防湿のためであろうが、基礎上端より90cm

まで、厚さ 2 cm 程度のタール状の物質が塗布されていた。基礎の内側は、外側タール状の物質が塗布されているレベルにコンクリートで床が張られ、壁は床面上 40cm までセメント状の腰壁が、以上には漆喰が張られていた。

配管は館内はすべて鉄製で床下、壁内に隠されて配されていた。また、下水管は館内より壁外に出ると土管となるが、そのジョイント部には汚臭防止ための「U」字管を配していた。土管は、調査区中央方向へ延びている。中央の攪乱では一部壊されているが、その中で方向を変じて、南方へ続いている。

なお、懐徳館の基礎の一部は総合研究博物館のアプローチに保存展示されている。

(堀内 秀樹)

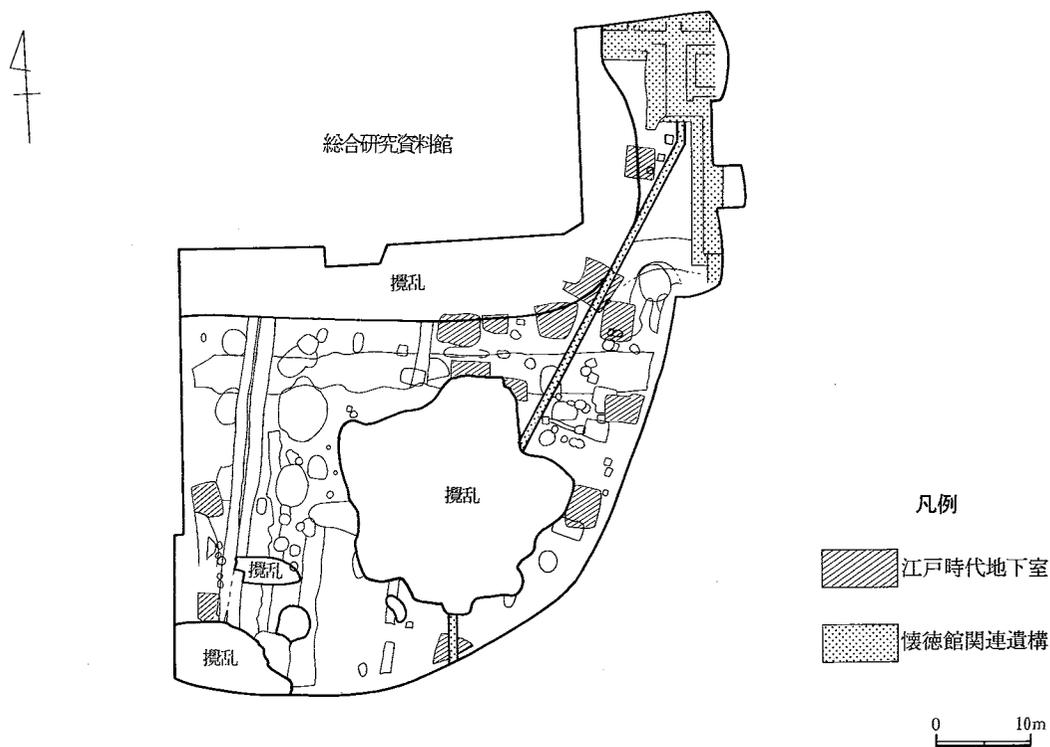


図16 遺構配置図

## 13 玄蕃所遺跡発掘調査略報

### 1 調査の経緯と経過

玄蕃所遺跡は千葉市花見川区花園町1035番(北緯35°39'18", 東経140°04'35")の台地上に所在する先土器時代, 縄文時代, 古墳時代, 平安時代の複合遺跡である(図17)。遺跡名は千葉市教育委員会によって, 台地下の学史上著名な検見川泥炭層遺跡と区別するために旧小字名をとり玄蕃所遺跡と命名された。

今回の発掘調査は東京大学検見川体育セミナーハウスの新営に伴うものである。遺跡の試掘調査は1992年に千葉市教育委員会によって行われた。この際住居跡が検出されたため, 東京大学埋蔵文化財調査室が確認調査と事前調査を担当した。

確認調査は遺跡範囲6900m<sup>2</sup>の13.4%にあたる930m<sup>2</sup>(このうち下層の先土器時代の確認調査面積36m<sup>2</sup>)の発掘を, 1994年7月11日から7月18日まで行った。その結果, 縄文時代の住居跡, 陥穴, 古墳時代の溝状遺構, 平安時代の住居跡, 時期不明の焼土遺構等が確認された(図18, PL.16上)。

事前調査は, 確認調査で検出された遺構が建設予定地北東部の台地縁辺に集中していたため, 千葉市教育委員会と協議の上, 調査範囲を限定して台地縁辺部の496m<sup>2</sup>に対して1994年7月19日から8月21日まで行った。調査中に先土器時代の石器集中部が検出されたため, この部分の発掘調査(下層の先土器時代の調査面積52m<sup>2</sup>)も行った。また, 事前調査期間中に建設予定地南西部の工事用取り付け道路部分の調査が必要と判断されたため, この部分の試掘調査も並行して行ったが, 遺構・遺物は全く確認されなかった。

### 2 調査の成果

玄蕃所遺跡の発掘調査では先土器時代から平安時代までの遺構遺物が確認されたが, それは以下のようにまとめられる。

**先土器時代** 石器ブロック1カ所がソフトローム層最上部で確認された(PL.16下)。出土遺物は総数518点, このうち石器が393点, 礫および礫片(被熱したものも含む)は125点を数える。石器の器種および点数の内訳は, 半円錐形細石刃核3点, 細石刃28点, 打面再生剥片2点, 稜付き細石刃3点, 楔形石器10点, 削器15点, ハンマー2点, 磨石1点となっている。石器の石材は黒曜石が122点で全体の31%を占め, 残りは安山岩が主体となる。細石刃石器群はすべて黒曜石製である。

**縄文時代** 竪穴住居跡 1 基 (SI01) と陥穴 3 基 (SK04, 06, 07) が検出された。

SI01 (PL.17上) は建設予定地東端に位置し、1993年に千葉市教育委員会が行った試掘調査において一部が確認されたものと同一である。平面形は長方形で、長軸4.5m、短軸 3 m の規模を有する。床面中央東よりに柱穴が 1 基だけ確認された。また、地床炉は明確ではなく床面上で焼土の集中している場所が確認されただけである。竪穴住居跡の覆土から縄文時代前期後葉の浮島 2 式の破片が 8 点出土した。出土土器の編年学的位置付けと住居の構造上の特徴から縄文時代前期後葉の住居跡と考えられる。

SK04, 06, 07は小判形の土坑で、1.5m 前後から大型のもので約 2 m の深さを有する。なお、陥穴は散漫に分布しており、配列に規則性は見いだせなかった。

**古墳時代** 調査区北端の台地縁辺で溝状遺構 (SD03) の一部が確認された。覆土中から古墳時代後期の鬼高式の甕の胴部破片が 2 点出土したことから 6 世紀頃のものと考えられる。

**平安時代** 竪穴住居跡 (SI02) 1 基が検出された (PL.17下)。住居は 1 辺約 3 m のほぼ正方形で、西壁に竈が設置されている。浅い壁溝が壁際をめぐるっているが、柱穴等の内部施設は確認されなかった。竈および住居床面から土師器の長甕、坏蓋および須恵器の甕の破片等が出土した。出土した遺物から平安時代初頭の住居と考えられる。

この他の遺構として調査区西端で時期不明の焼土遺構 (SX05) が 1 基確認された。また、テニスコート造成層下の耕作土層から江戸時代末の陶磁器片および泥面子が出土しているが、遺構等に伴うものではない。

当初、玄蕃所遺跡は検見川泥炭層遺跡に隣接するため、縄文時代から古墳時代の遺構が濃密に分布することが予想されたが、試掘調査、確認調査の結果、遺構は殆ど検出されず、事前調査の範囲も比較的狭い範囲に限定することができた。

本調査の結果、以下のような考古学的所見を得ることができた。

1、先土器時代の細石刃石器群は、黒曜石の半円錐形細石刃核および石核調整剥片等を含むもので、東関東地域では量的にまとまって出土している事例は少なく貴重である。また、石器ブロックは、楔形石器、削器やハンマーストーン等が出土していることから、ワークキャンプ的な機能をもつ場と考えられる。なお、細石刃石器群にともなう楔形石器の事例は非常に少なく注目される。

2、縄文時代前期後葉の浮島式期の住居は千葉県西部では検出例が少なく、出土した浮島式土器とともに、浮島式の主体的な分布域の外縁部における重要な資料として評価される。

(武藤 康弘)



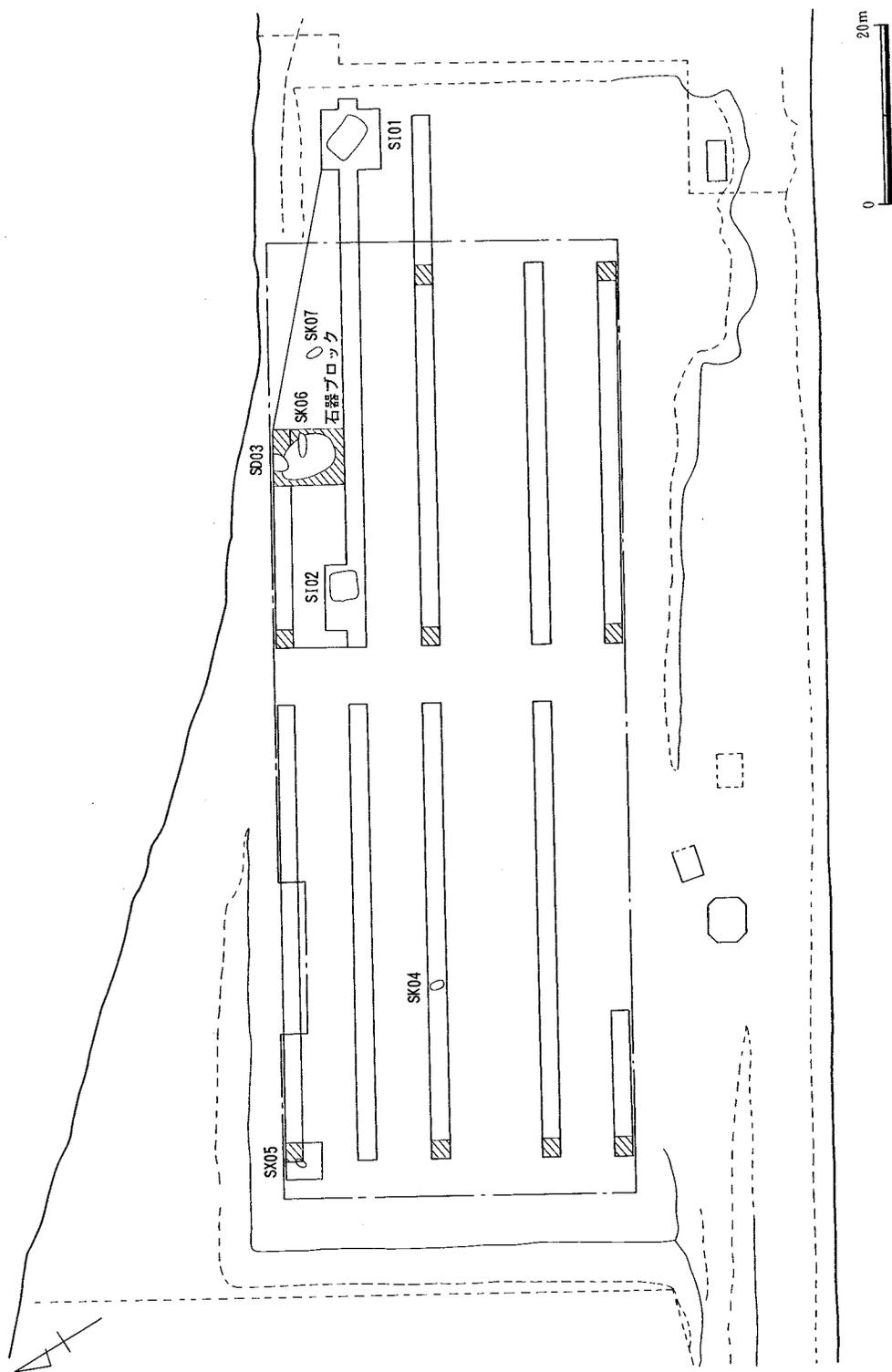


図18 玄蕃所遺跡全体図 (斜線は先土器時代の調査範囲)

## 14 本郷福利施設新営に伴う埋蔵文化財発掘調査略報

### 1 調査の経緯と経過

今回の発掘調査は本郷福利施設（宿舍）の建設に伴う事前調査である。1994年4月の試掘調査に引き続くもので、建設予定地593m<sup>2</sup>を対象として、1994年8月17日から10月19日まで行われた。

調査地点は史料および古絵図の研究から、加賀藩上屋敷の「東御長屋上壇」とよばれる下級武士の長屋と判明している。この長屋は、数度の火災による再建を経て、明治時代以降も大学の宿舍として利用され、昭和初年まで残存していた。

### 2 調査の成果

発掘調査によって確認された主要な遺構は以下のようなものである（図19, PL.18上）。

**I期** 貞享4（1687）年に上屋敷として整備される以前の遺構群で、南北に連なる生け垣の痕跡と推定される植栽痕（SK30, 31, 32）が確認された。

**II期** 上屋敷として整備された際の長屋の礎石列（SB04）が調査区全面にわたって検出された。また、長屋に伴う雨落ち溝（SD36）、石組みの排水溝と溜枒（SD02, 06）（PL.19下, 20）、便所（SL22）の遺構等も確認された。遺構面の上面は、厚さ約10cmの焼土で覆われ、礎石にも熱による赤化やヒビ割れが観察される。これは、元禄16（1703）年の火災の痕跡と考えられる。

**III期** 江戸時代中期の遺構群で、焼土層をきって構築されている。この時期の長屋の基礎遺構は南北に連なる柱穴列（SB34）等、その一部しか確認されていないが、前代の基礎をそのまま利用している可能性もある。この時期は長屋の前庭に地下室が多数構築されている。そのうち、地下室（SU20）の底面では富士山の宝永4（1707）年の噴火の火山灰が確認されているので、遺構群の年代の上限は18世紀初頭、出土遺物の年代から下限は18世紀後半と推定される。

**IV期** 江戸時代後期の遺構群で、調査区南側で基礎遺構の一部（SB50）と石組溝および溜枒（SD01）等が確認された。基礎遺構は単独の礎石ではなく複数の石をブロックとした構造である。石組溝も検知積みではなく、板状の石を組み合わせた構造で前代よりも簡略化している。なお、排水溝の吐口は構外の歩道の脇に現存している（PL.18下・19上）。18世紀末から19世紀前半の年代が想定される。（武藤 康弘）

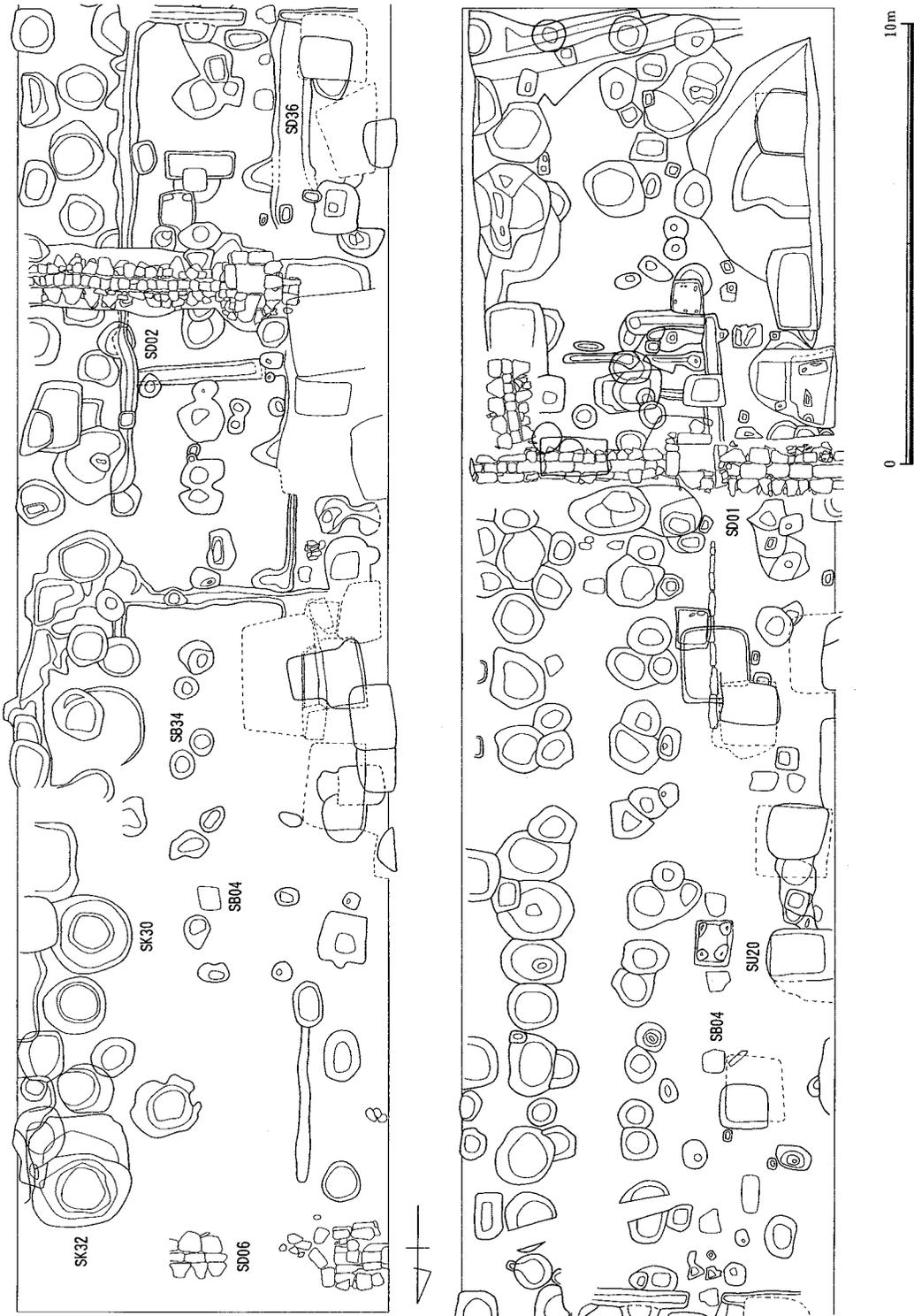


图19 本郷福利施設地点全体图 (上:北側調査区 下:南側調査区)

## 15 医学部附属病院看護婦宿舎ゴミ置き場地点埋蔵文化財発掘調査略報

### 1 調査の経緯と目的

本報告は、医学部附属病院看護婦宿舎ゴミ置き場の建設に伴う事前調査の略報である。調査は、1995年1月30日に開始し同年3月2日に終了した。調査面積は東西10m、南北6mの60m<sup>2</sup>である。調査地点は、附属病院地区の東、いわゆる本郷台地の東端にあたる。隣接する附属病院病棟地点では、本郷三丁目と春日町を源流にし東北流し、大学の構内に入り中央診療棟に至り、そこで向きを変えて東流し不忍池に流れる沢の存在が確認され、西側に古墳時代・平安時代といった住居の集中が指摘されている（藤本1990）。隣接する看護婦宿舎地点・MRI地点では古墳時代の住居址を検出しており、本地点でも住居址の検出が予想された。また、附属病院地区の大部分が江戸時代の富山藩・大聖寺藩の上屋敷で、当地点が富山藩邸の一部に該当することから江戸時代の遺構の検出が予想された。

### 2 調査の結果

調査の結果、縄文時代の住居址1軒、古墳時代の住居址6軒、江戸時代の生活面5面（B～F面）を確認した。C面上には安政8（1825）年の火災の片付けに伴う焼土面が確認された。D面では南側にごみ穴（SK24）を検出し、瀬戸・美濃系の貧乏徳利をはじめとする陶磁器類、食物残渣が出土した。E・F面では植栽痕（SK27）、地下室（SU12、25）を検出した（PL.21）。SU12では「泉州麻生」銘の焼塩壺が出土した。

B～F面の遺構分布状況はそれほど密でなく、地下室、ごみ穴、植栽痕といった遺構の検出が特色としてあげられる。この状況から当地点は江戸時代を通じ、オープンスペースとして土地利用されていたと推定できる。『安政五年（1858）年調後未年写之江戸御中屋敷図』（註）によると調査地点は御殿の東に該当し、塀の記載がみられるのみであるが、調査の結果何らかの形で土地利用されていたことが判明した。

今後、各時代について他の地点の調査結果を踏まえて検討を加えていきたい。

（原 祐一）

### 註

富山県立図書館蔵

### 参考文献

藤本強 1990「第2節 位置と環境」『東京大学本郷構内の遺跡 医学部附属病院地点』東京大学遺跡調査室

## 16 薬学部資料館新営に伴う埋蔵文化財発掘調査略報

### 1 発掘調査の経過

薬学部資料館の伴う埋蔵文化財の発掘調査は、1995年7月24日から9月1日まで、建設予定地約600m<sup>2</sup>を対象として行われた。

調査は表土以下明治期の煉瓦造り建物跡の整地面までを重機掘削によって行い、それ以下の江戸時代以前の遺構面を人力掘削によって行った。当初は、西側に隣接する薬学部新研究棟地点の発掘成果から重機掘削の深度を約2mから2.5mと想定していたが、掘削の進行によって調査区の北東側に向かって傾斜する谷地形の存在が明らかになり、北東側のローム層上面の深度は現地表下6mに及んだ。

### 2 発掘調査の成果

今回の調査では、江戸時代の遺構群の他、谷部の遺物包含層から縄文時代晩期の土器群が、立川ローム層のIV層下部から先土器時代の礫群と石器が出土した(図20)(PL.22上)。  
**江戸時代の遺構・遺物** 本郷キャンパスには江戸時代に加賀藩前田家上屋敷が存在したが、古絵図との対比によると発掘調査地点は「御守殿」の東端部に位置づけられる。調査区内の旧地形および遺構の配置も、西側に僅かに平坦部が存在し柱穴等の建築遺構や井戸跡が検出されているが、東側は傾斜面となり長方形の大型土坑や円形土坑および方形土坑等が傾斜変換線に沿って配置されている。そして、東端部に至っては江戸時代の遺構は全く確認されなかった。

主要な遺構としては、長方形の大型土坑(SK06)、円形土坑(SK08)、方形土坑(SK10)等があげられる。この他に調査区南東側で井戸が2基(SE13, 09)確認された。遺構群の時期は出土した陶磁器から大半が江戸時代前期の17世紀前半の年代が与えられるが、井戸はこれより新しくSE13は17世紀後半、SE09は19世紀前半の年代が与えられる。17世紀前半の遺構群は、SK10で梅鉢紋の瓦当が出土していることから加賀藩の中屋敷の遺構と判断される。

江戸時代の遺物は、陶磁器、瓦、硯片、銭貨等多岐におよぶが、いずれも江戸時代前半の時期のものが主体となる。陶磁器では、肥前磁器はわずかで志野丸皿等の陶器が主体となる。かわらけも胎土や器形、整形技法等古式の様相のものが多く、御殿下記念館地点920号遺構出土資料と類似している。また、白かわらけは附属病院地区中央診療棟地点の池お

よび御殿下記念館地点532号遺構出土資料と同一で、江戸時代でも最も古式の資料である。また、SK10からは、かわらけ、天目茶碗、織部向付、肥前磁器碗等がまとまって出土しており、1640年頃の年代が与えられる。一方、出土した銭貨も古相を示しており、寛永通宝はわずかで洪武通宝等の中国銭系模鑄銭の出土量の方が多傾向がある。この他に、金箔を施した平瓦の破片を手製の硯に転用したものが包含層から出土した。

**縄文時代の遺物** 縄文時代の調査は江戸時代の遺構の下層で、調査区北東側の埋没谷を中心として行った。遺構は全く確認されなかったが、谷に堆積した褐色土を班状に含む黒色土層を中心として縄文時代晩期の土器が出土した。この土層は隣接する御殿下記念館地点でも縄文時代後期から晩期の遺物包含層として確認されている。縄文土器の主体となるのは晩期中葉の時期で、安行3d式、姥山II式の深鉢の破片が出土している。遺物の垂直分布状況と層位との関係は現段階では十分に検討していないが、調査時点の所見では包含層の上面で安行3d式が、包含層の中位から姥山II式が出土する状況が確認された。出土した姥山II式の深鉢形土器は、赤褐色の飴色の胎土が特徴的で下総方面からの搬入品と考えられる。

**先土器時代の遺構・遺物** 江戸時代の遺構の調査中に埋土から黒曜石製のナイフ形石器が出土したため、縄文時代の包含層を掘り上げてローム層上面までの精査を完了した段階で、2×2mの試掘坑を7ヵ所設定し立川ローム層の試掘を行った。その結果、谷部の第1試掘坑と第7試掘坑で先土器時代の遺物が出土した。第1試掘坑ではIII層中から黒曜石の剥片が1点出土したのみであったが、第7試掘坑ではIV層下部で礫群が確認されたため4m四方の調査区を設定し、礫群の範囲を確認することにした。その結果、1×3mの範囲に広がる礫群と周辺から8点の石器および剥片を検出した(PL.22下)。礫群は総数680点で、径1mの範囲に集中した小群3単位で構成されている。

石材は砂岩および珪岩からなり、いずれも被熱により非常に赤化している。礫群の周辺から出土した石器は安山岩製のナイフ形石器、黒曜石製の小型の剥片および珪岩製の大型剥片計8点である。礫群の外縁部から出土したナイフ形石器は横長の剥片を素材とし、その一側縁に加工を施したこの時期の典型的な資料である。

ローム層の堆積状態は北東方向に開いた埋没谷にそって堆積しており、第2試掘坑北壁の立川ローム層第2暗色帯は東側へ約12度傾斜している。第5試掘坑西壁の同層の北側への傾斜は約7度である。

(武藤 康弘)

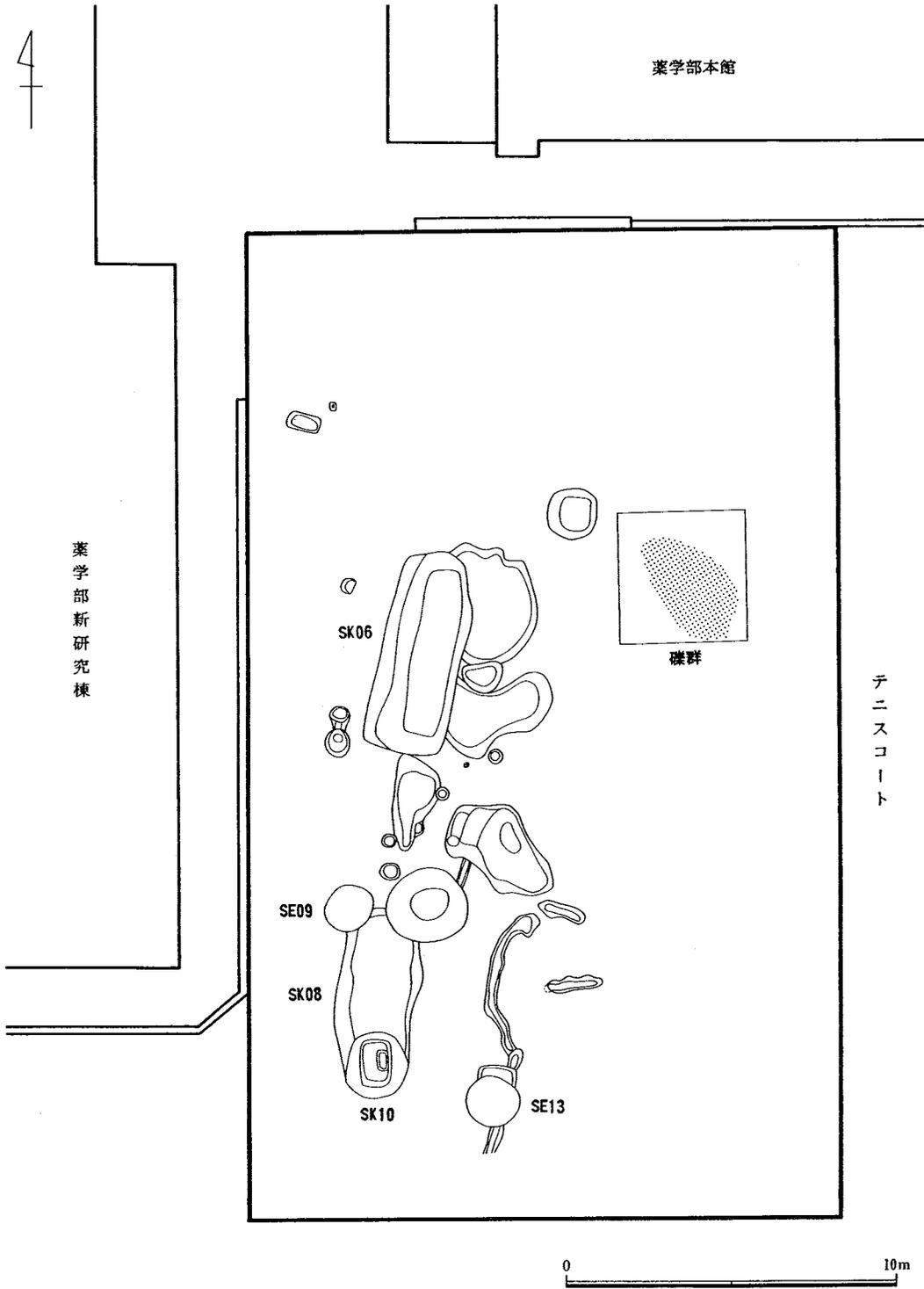
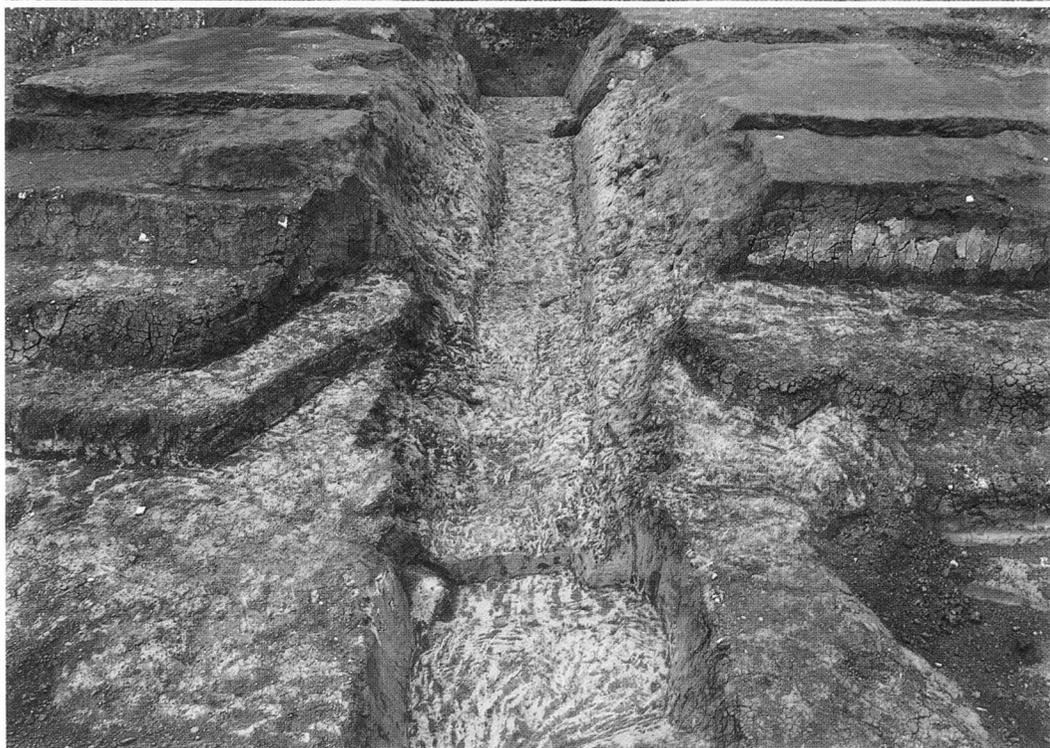


図20 薬学部資料館地点全体図

## 写真図版





上：全景，下：SD45





上・中：SU300，下：SK152・290





上：SE271，下：SL86遺物出土状況





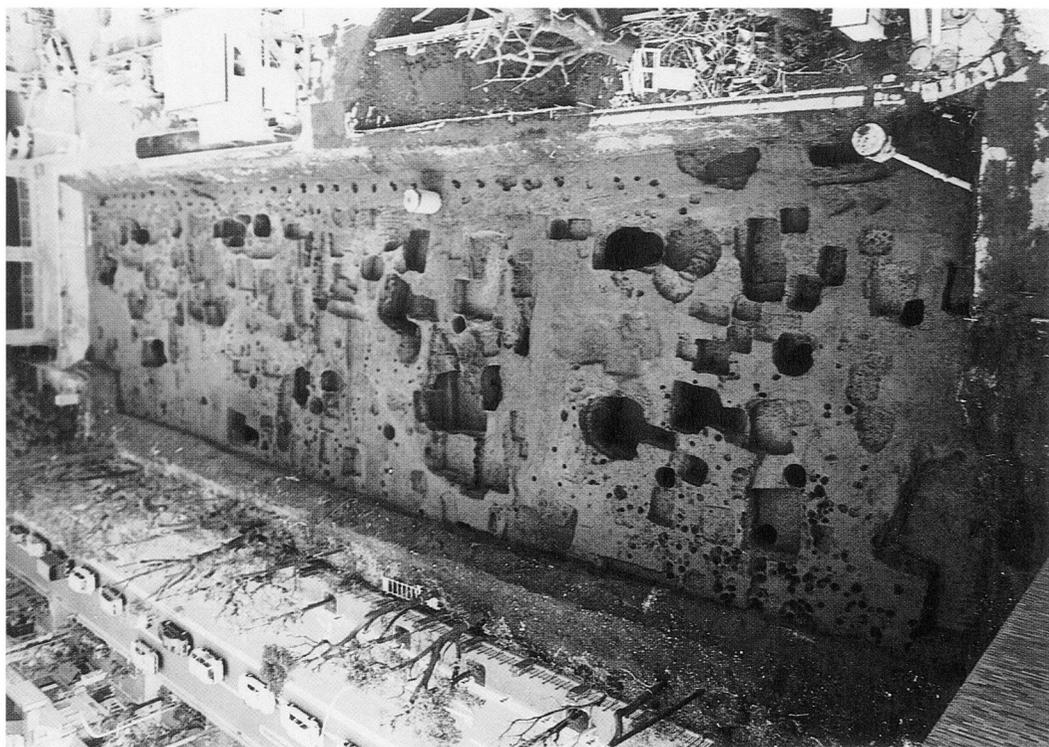
上：全景（北から），下：全景（西から）





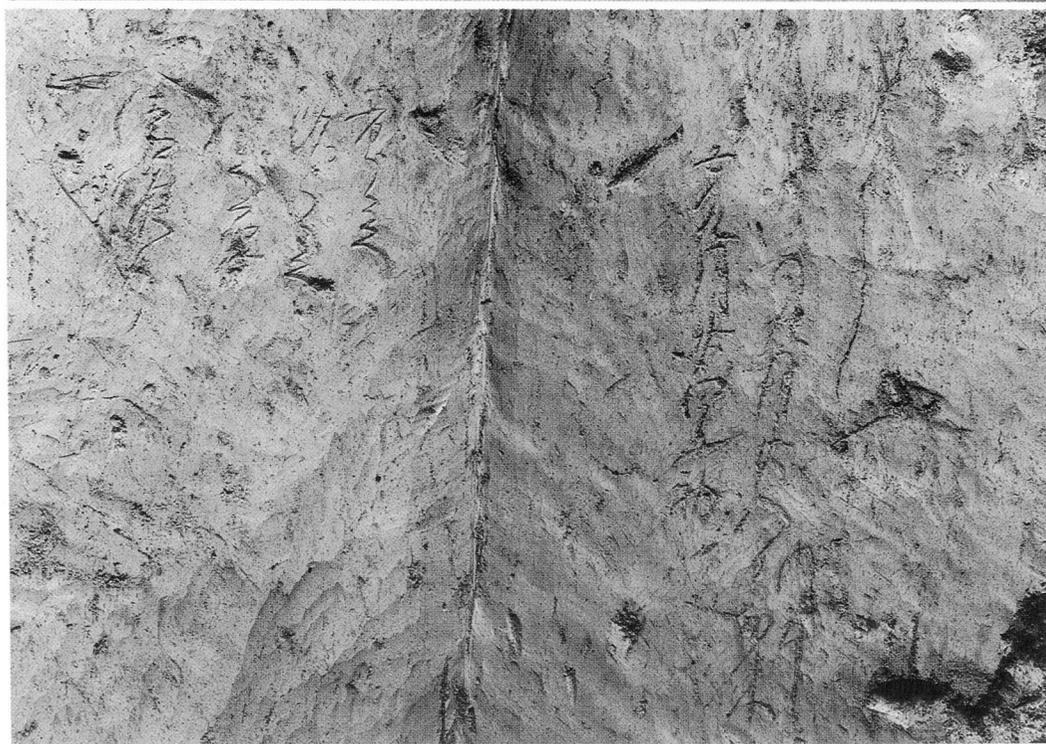
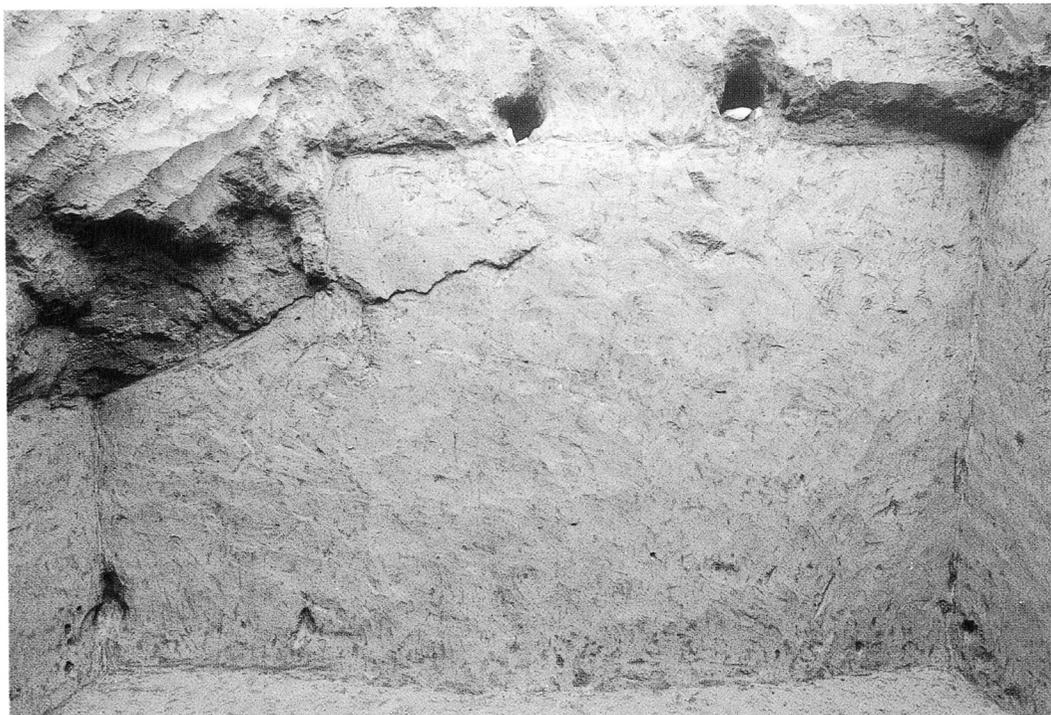
上：SK45遺物出土状況，下：SU14





上：全景（南から），下：SU327





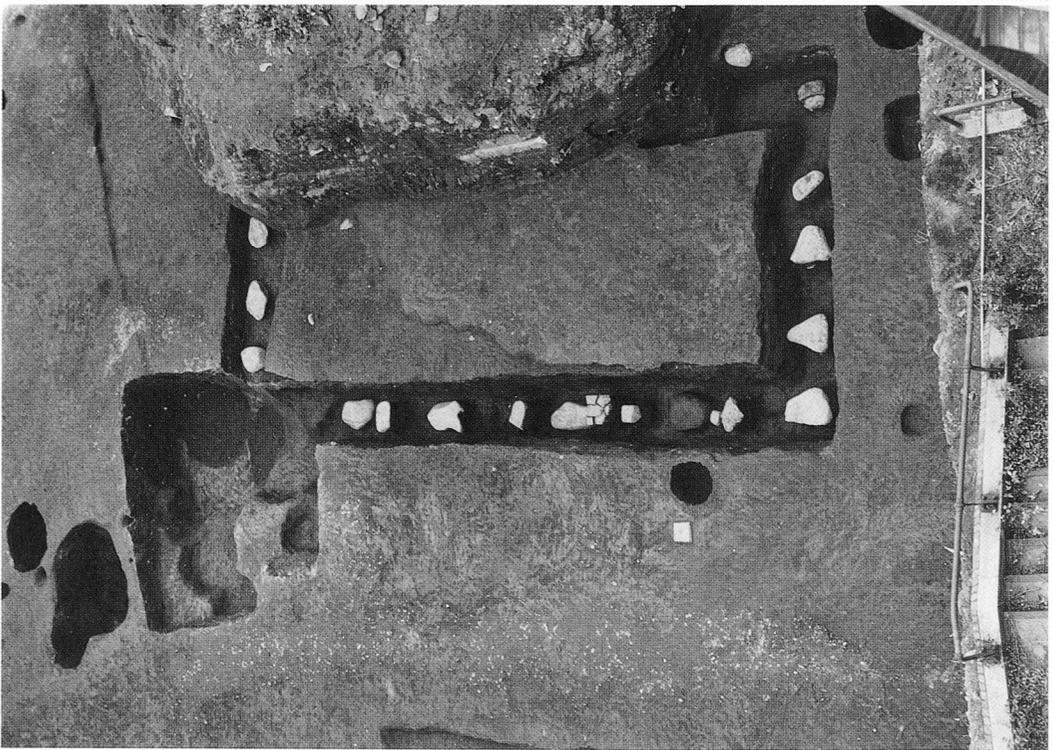
上：SU327側壁，下：SU327壁に刻まれた文字





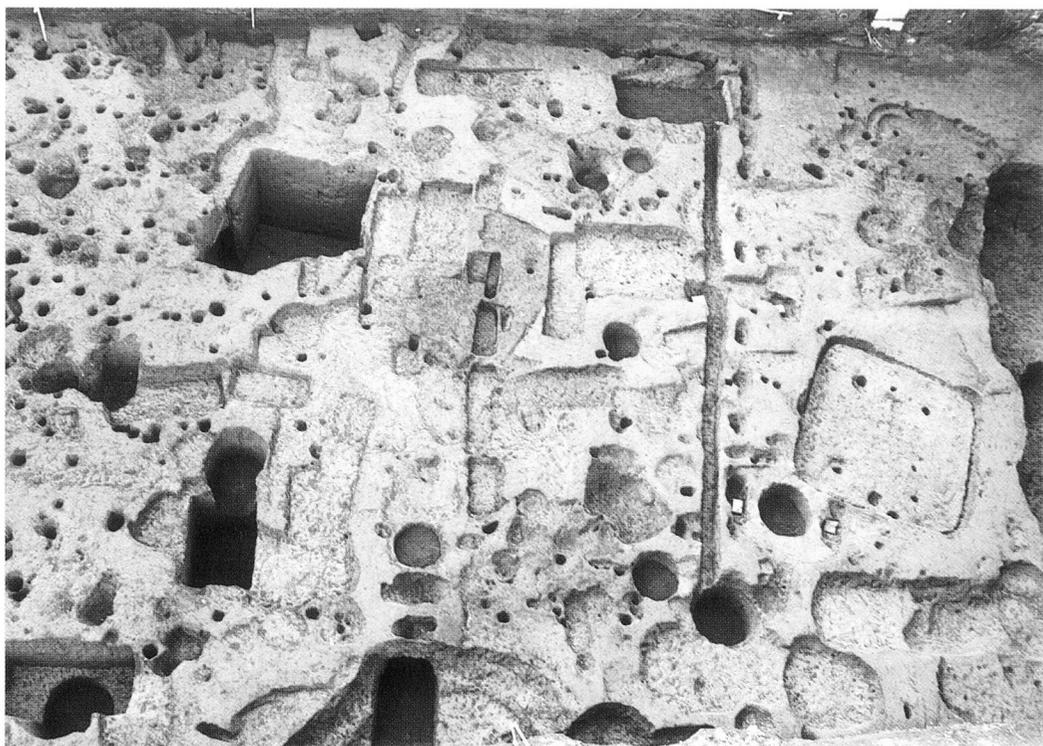
上：全景，下：SU07





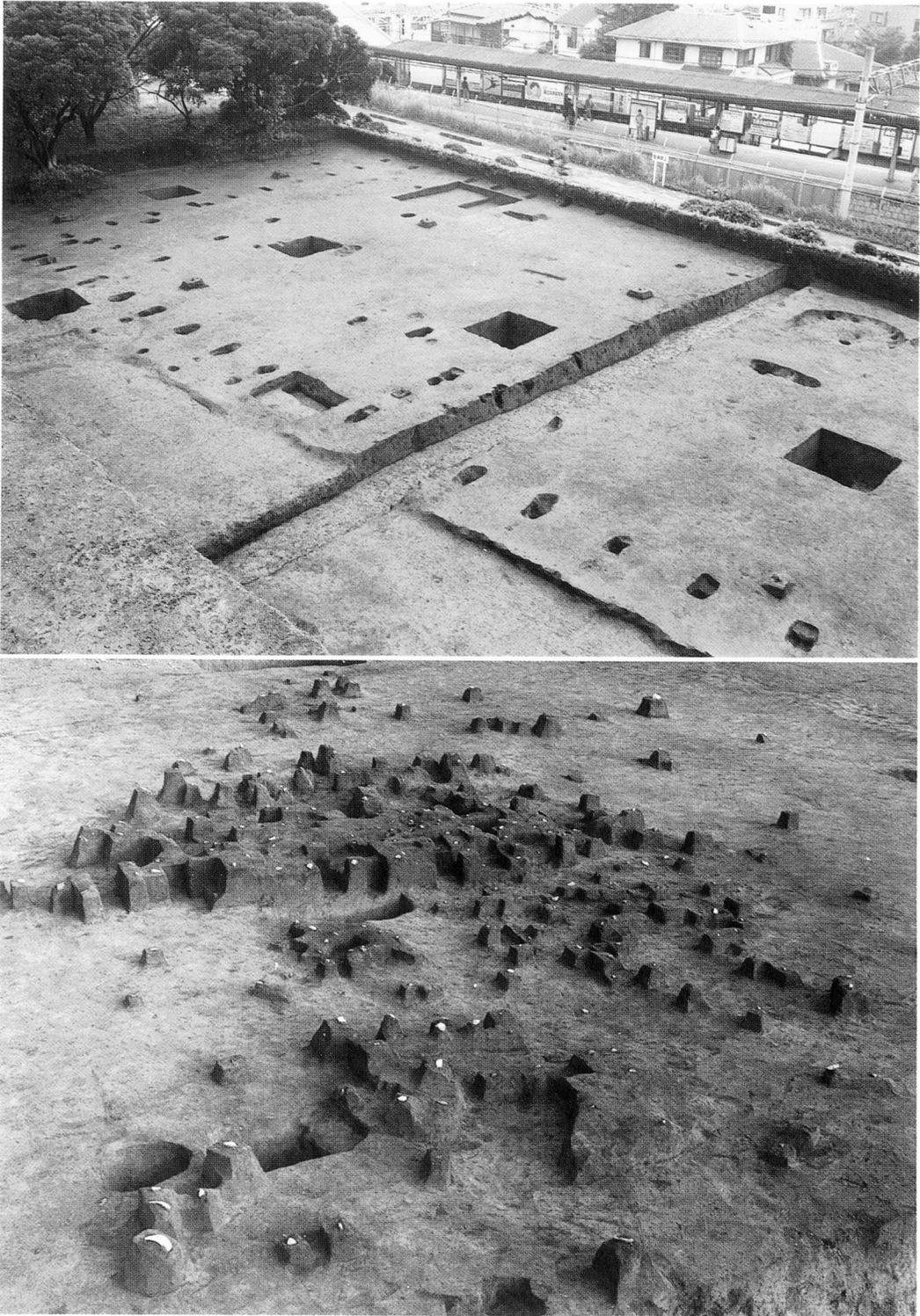
上：第1遺構面礎石検出状況，下：第2遺構面 SB186





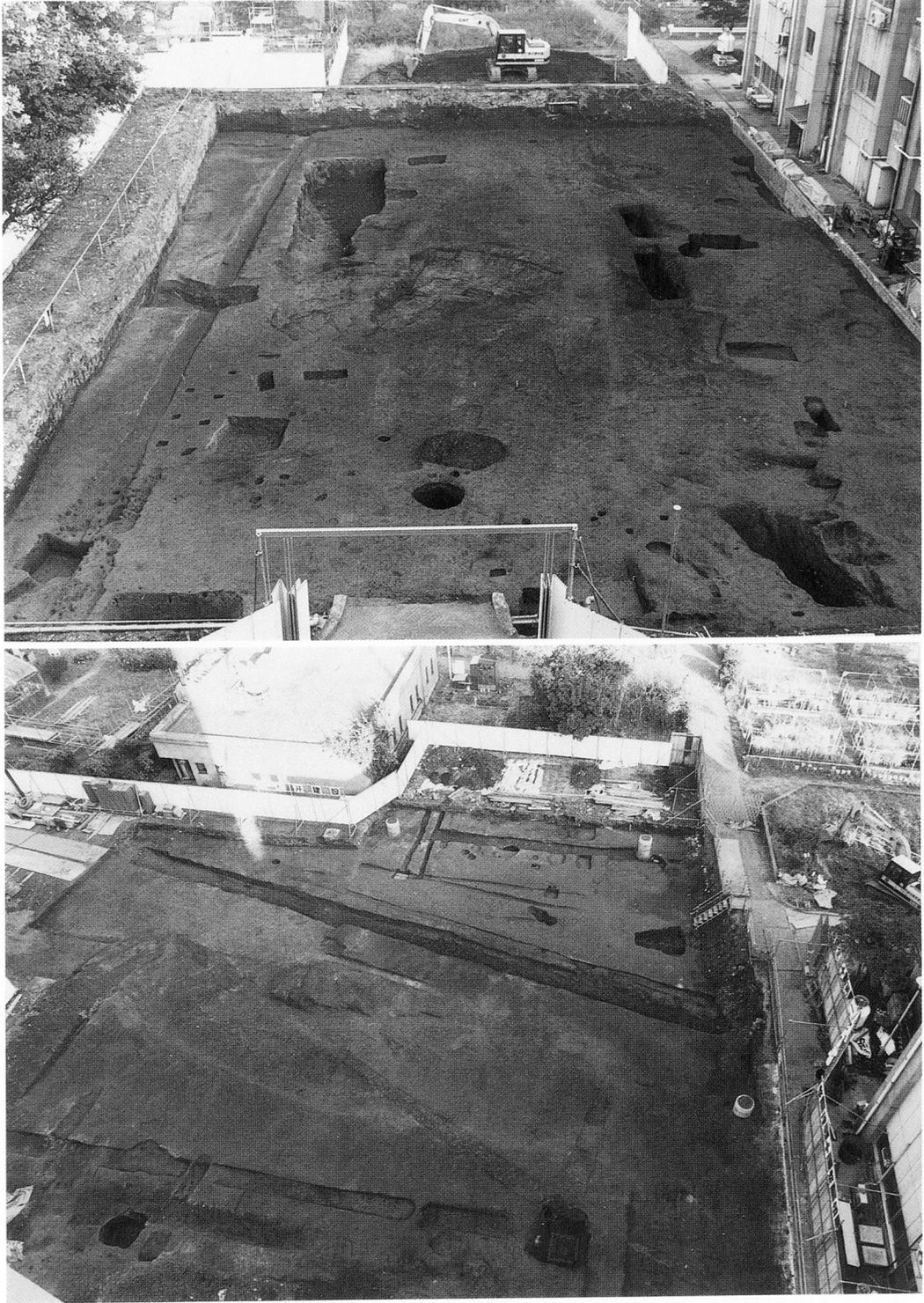
上：第3遺構面全景，下：SI1001





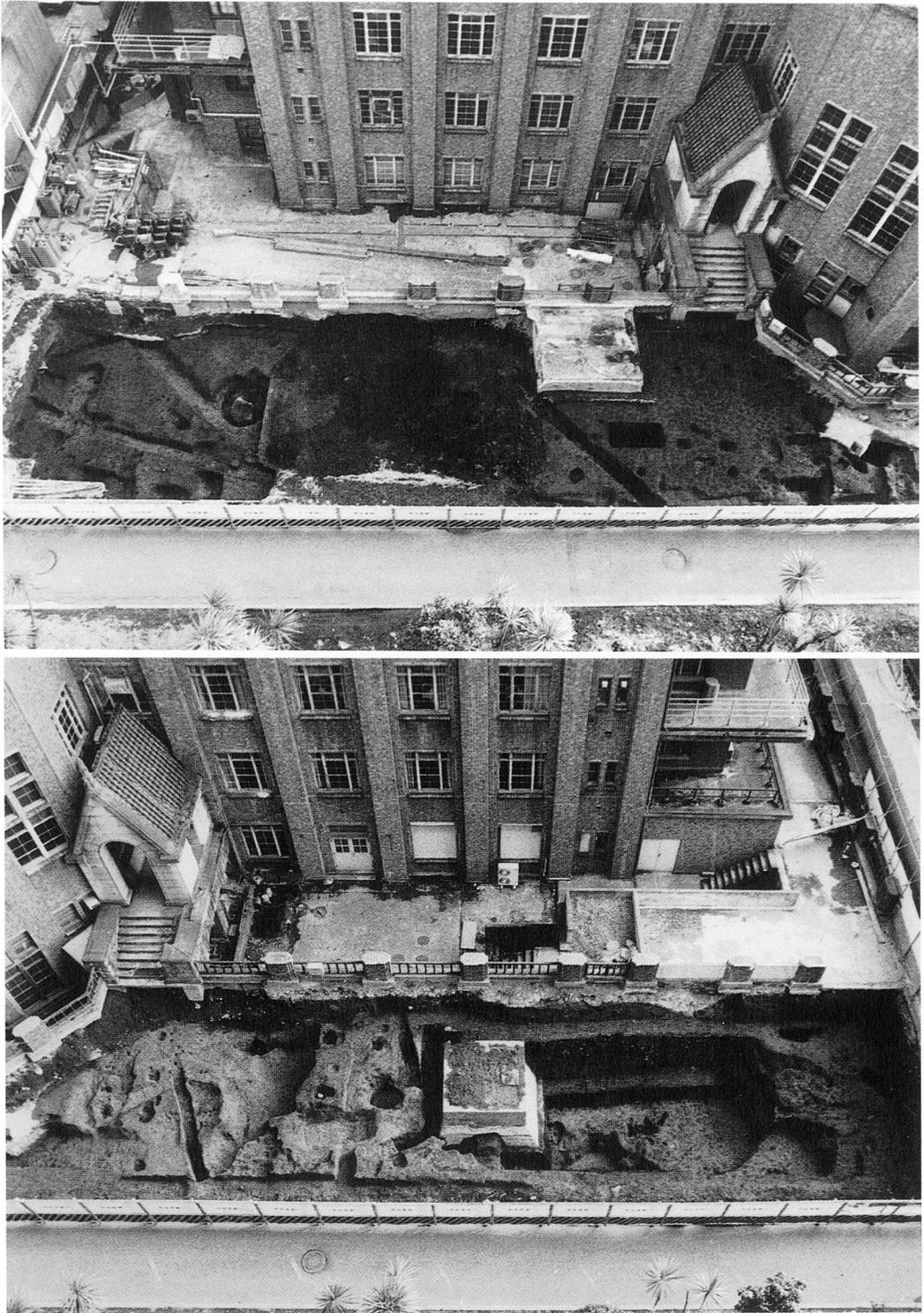
上：全景，下：集石遺構（縄文時代早期）





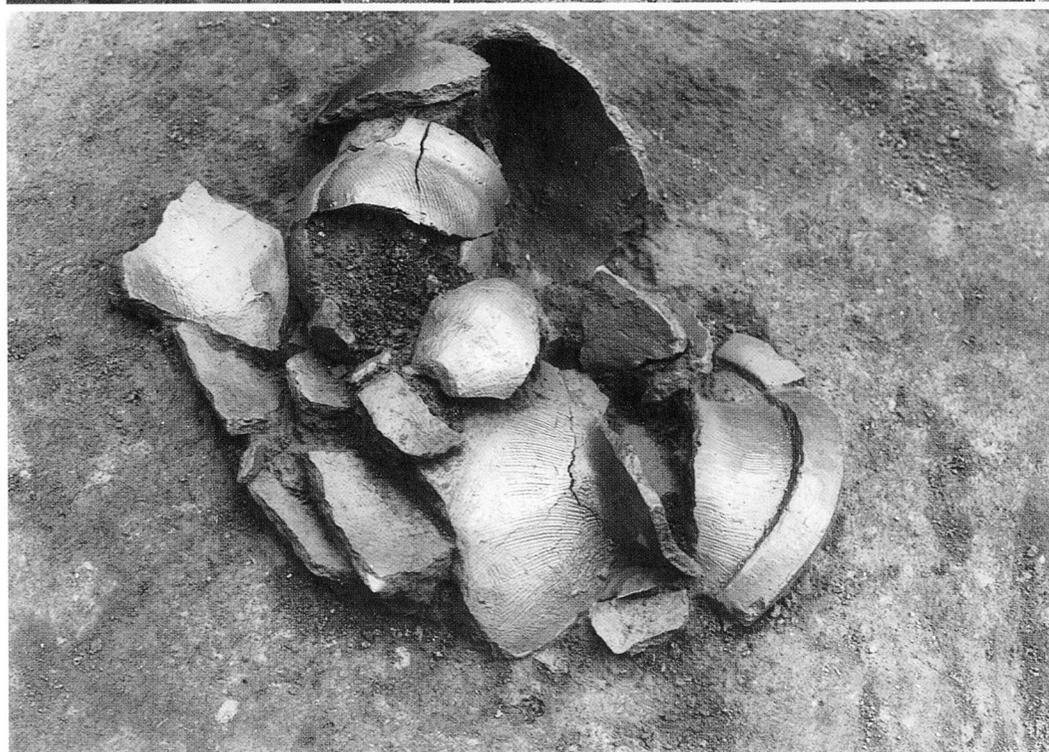
上：I期全景，下：II期全景





上：全景（西側），下：全景（東側）





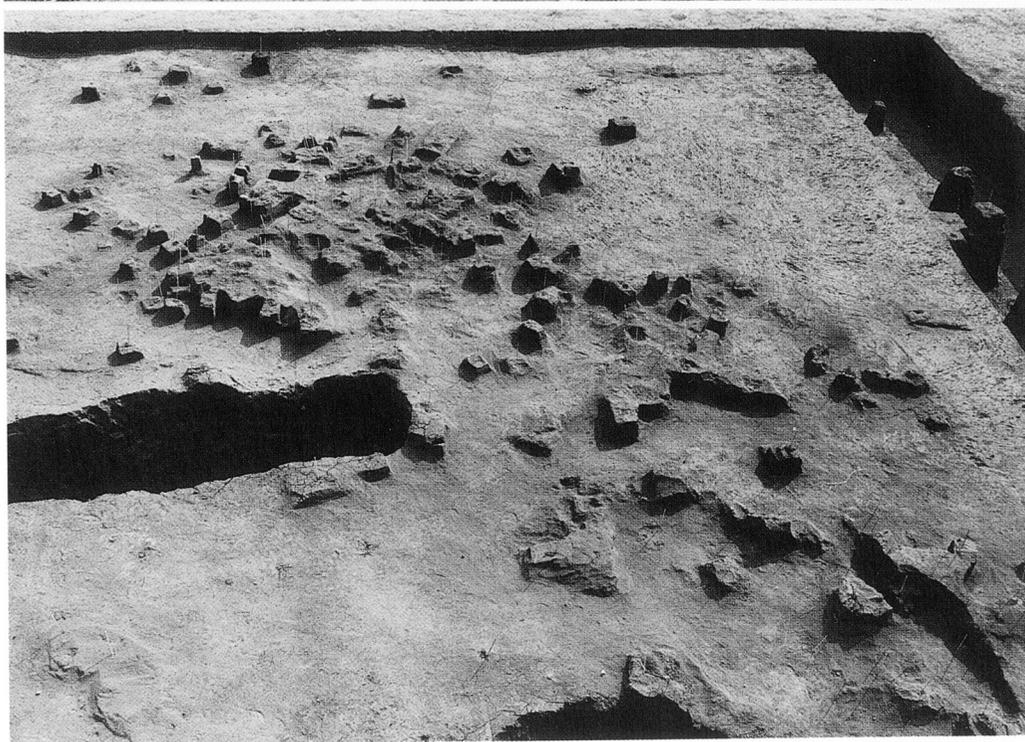
上：第3遺構面全景，下：SI04遺物出土状況





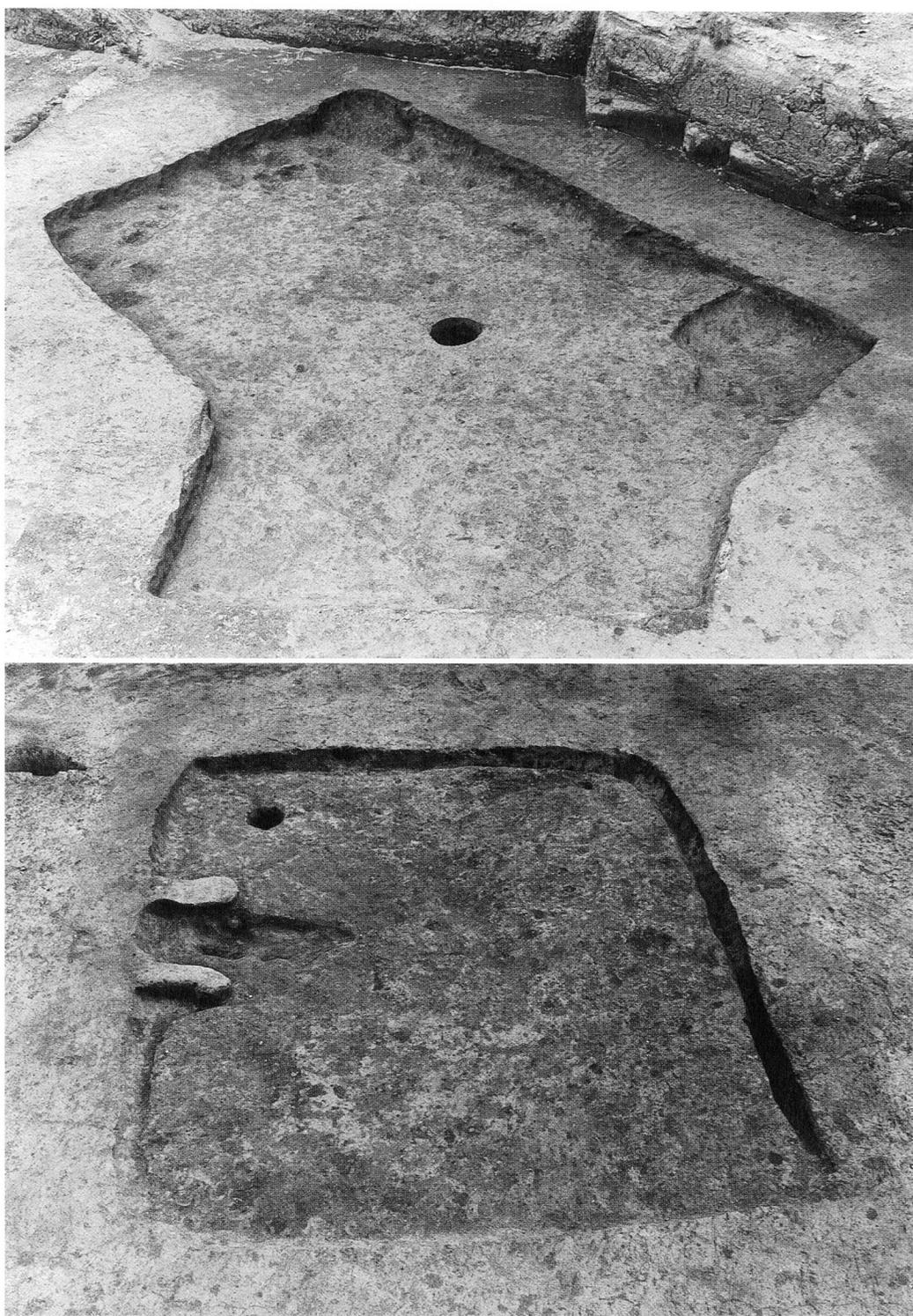
上：全景，SE01





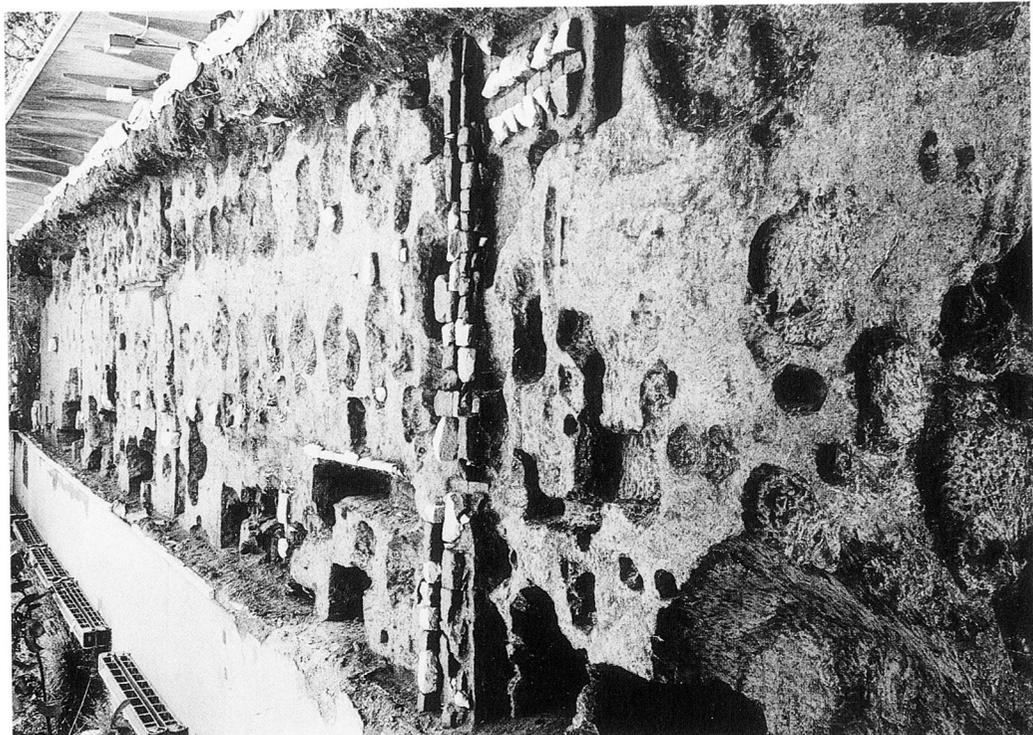
上：全景，下：石器集中地点（細石刃石器群）





上：SI01（縄文時代前期），下：SI02（平安時代）





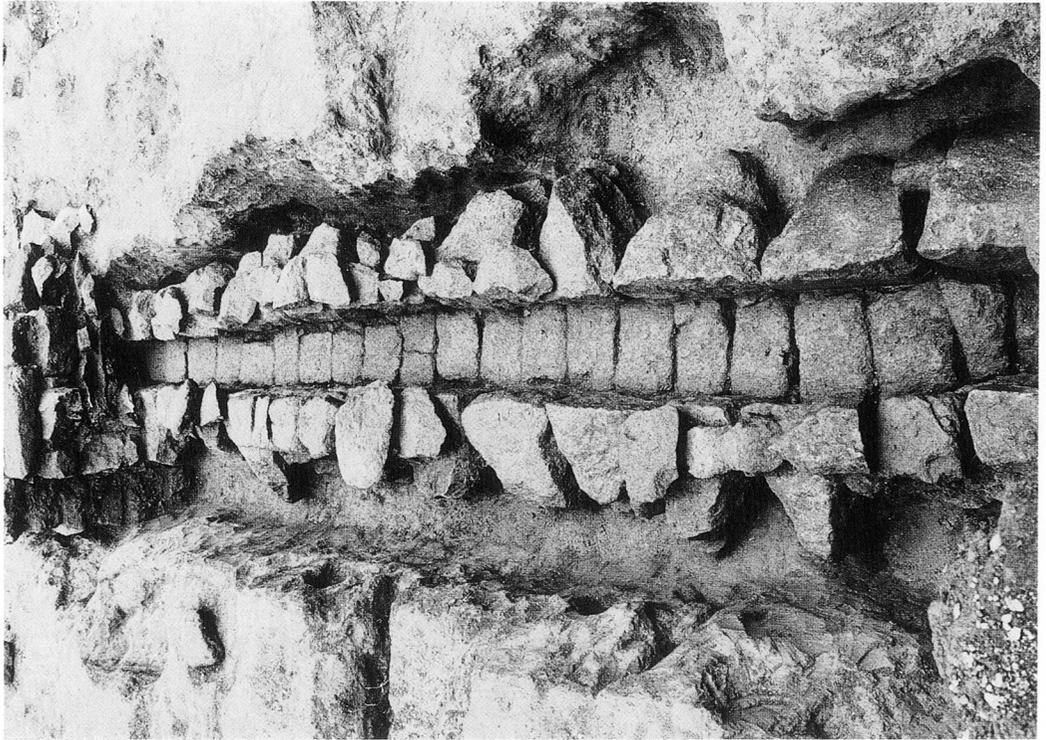
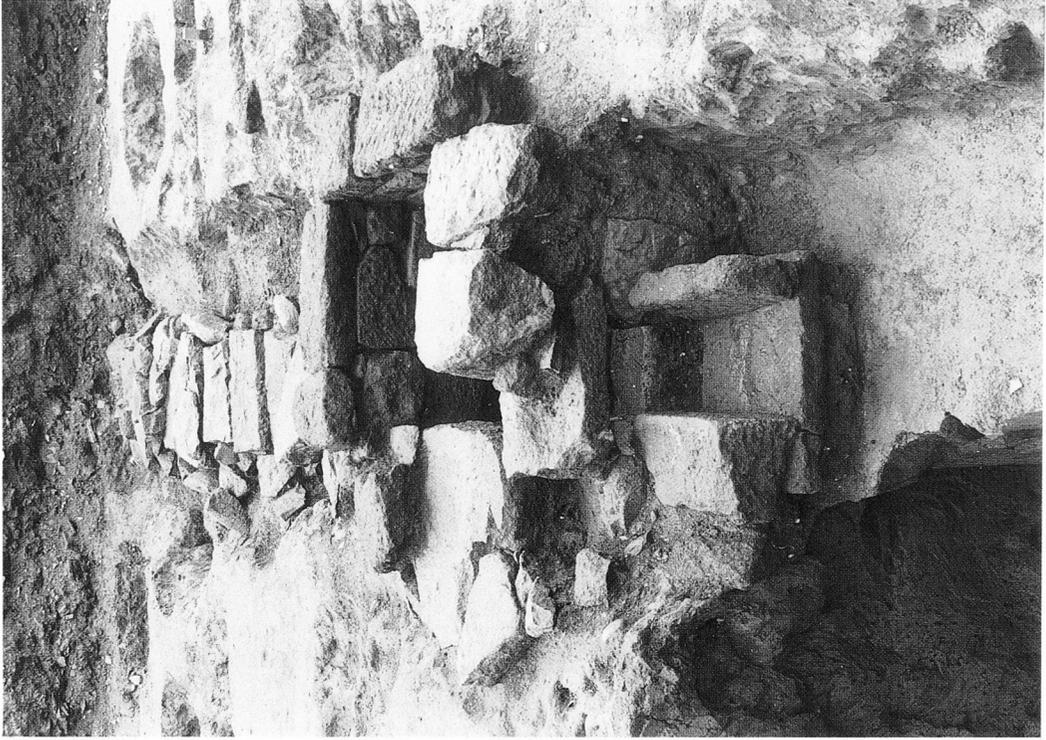
上：全景，下：SD01





上：SD01吐口，下：SD02溜枳





SD02





上：全景，下：SU25





上：全景，下：礫群（IV層下部）

